重鐫

日本歳時記

秋
冬

人ミ智嚢大徳万寶全書　苦を救ふ物　全九冊

錦嚢万家節用寶　全一冊

小兒醫術療治草　全三冊

新撰季分部類字引　小本　全一冊

藥山山水傳　全二冊

柚中童子往来　小本全一冊

源原家藏書

日本紫時記巻之五

秋

遠ひはゝ腸氣とやぬり冬飯酒をなし
春夏を論ずるにおよばず夜ハ寒き時衣をぬき裸すべからず脇ハ脇穴皆背にあり風と取又萩多生ハ風背より入中風の源となり灸ハ如何これをほどこすべし疾ありてもなくても八味地黄丸を服すべし二白と蕪蔔とハ風を發ずる故冬月收斂して多く揚物を食ふべからず

損ずる物よりも秋氣を燥るより宜く胡麻を食ふべし

書を論じては宜く家を治むるの道を務むべし新穀初て熟して老人疾疫癘瘍と多く發ずる故なり新米ハ決して食ふべからず又早稻の米熟せざるうちは香美なりと雖ども多く食ふ時ハ必ず風毒と動りひとしく癘疾と發ずるうれひあり能脾胃をやぬるうれひなし

冬月厚衣ありといへども秋衣をぬぐべからず老人稚子ハ勿論壯年の人といへども冬月ハ必ず綿入を用ふべし

獎女むすめ
小兒おさなご
摂攝
衣服きもの
玉事たまごと
含賣要異よいそく古人の云秋九十日含嚥乃腑と食へり次
書集姫のつそく古人の云秋薑と食すれば人の
喜氣を増す也心腑胸府
天年を夭ふ延年
如かく薑と食と書集姫の
筋力と減す

七月 立秋ハ七月の節ニ入ル 凉風 律と爽明とをもて
それぞれよりてもとつきくるをもて
也よりてつきくるをもてとなり

六日 沐浴

七日 七夕と云又星女ことをいふ 乞巧奠 嵯峨天皇
七月七日織女牽牛 很會乃義
五雜俎ニ元織女牽牛の事後漢の侯瑾の
ク妄言をもつて物語ると記り 紙
き婦人女の作
墨土形 帶佩
天上乃列宿とて汚穢と
織しものを示ものやしと

世の物の稼(くく)ぎと云つ而(て)世事(よごと)の
よく久(ひさ)しきをあとなきものに
なりくる人を初(はつ)て翫(もてあそ)ぶ
ものとやいふべき等の料(はかり)こゝ得(え)のげよと云
なりと却(かえ)つて其(その)名(な)を失(うしな)ふ如(ごと)き又
止事(やむごと)なきと云(いう)こと也(なり)これとてもかゝる
いそぐ天(あま)と拙(つたな)それざるかたより新煤(にいすす)払(はらい)
煮(にる)酒(さけ)煮(にる)豆腐(とうふ)等(など)の料(はかり)を領(うけ)取(とり)ん事(こと)人(ひと)も
世事(よごと)そゝとも却(かえ)つて又(また)俗(ぞく)ならぬ
二星(にせい)あひ会(あい)と云(いう)こと雑記(ざつき)に七月七日(しちがつなのか)両祭(りやうさい)
酒(さけ)煮(にる)豆腐(とうふ)等(など)のことをあやまり伝(つた)へ

七夕乃(の)うた

年(とし)毎(ごと)の事(こと)葉(は)集(あつめ)よりも乙(おつ)ひこ星(ぼし)
初(はつ)よりの水(みず)行(ゆく)末(すえ)の雑風(ざつふう)みなひこ星(ぼし)に
古今集(こきんしう)より乙(おつ)ひこ星(ぼし)の雑記(ざつき)に七月(しちがつ)七日(なのか)両祭(りやうさい)
年(とし)とに雨(あめ)を定(さだ)て七夕(たなばた)乃(の)ぬるよのこと
ゆきて夜(よる)風無(かぜなき)
契(ちぎり)こそ天(あま)の川(かわ)瀬(せ)の浅(あさ)くとも
後(のち)指(ゆび)遠(とほ)集(あつめ)ぬ指(ゆび)夫(それ)綱(つな)を寒(かん)
治(おさま)る世(よ)紀(き)りこそ天(あま)の川(かわ)瀬(せ)の浅(あさ)くとも
新拾遺集(しんしうゐしう)に集(あつめ)て兼(かね)関(せき)紀(き)古(こ)今(きん)
いく秋(あき)を綿(わた)ぬ七夕(たなばた)の後(のち)ひ物(もの)語(がたり)

新涼攜集子　弄活潑金魚

七夕乃弟杜牧

又　暴雨

雲陰月地一抹過　未抵經年別恨多　最恨明朝
渡車雨　不救回腸渡天河

又

雲慳子渡計相移　鵲駕填河渡一水還有再時

又

織女牽牛雙扇開　年年一度見依稀　人間去不回

○今日雲頭とくゝむ車ひり十郎氏ハそくむり宅
氏乃妹ゟ七月七日ハ雨ゟ犯すそう雖ニ異邦ニ
病とやまむそれ日ハはねよ麦餅とこゝろしめ
そ名日ゟよりくゝ索餅とゝくゝの雖とゟ
人こゝ七日雲繍とくゝ瘧病とうれえひ

山坂たゝかなゟおゝ
黒淫ゟ威し関節
関節ゟ夏傷於
「く撮ゟせハとゟ

日素餅と食したまふに病根流るゝが如し一分ハ
さて愛とまぬるゝ事なんや然してこれ程
なき世の人かゝる高言を作をくうん
○今夜二星と契をこめて凡果と淳の禮會をきり
雪花こゝろをく絲をつらぬ
ふる男女ともに才能事の稱をいひ乃歌成これを色紙
箋とのかゝり衣服と賜ふ書ふとさゝん事
ありしかし名事權強よりて天子勝宴七年にてはり
しかし名事權強よりて又
七夕ぬまふもとゝ祭りを華乃蓋と祝ふこと

て機乃蓋よりくもの針勅撰集の奇ま
ぬまよの奇ふるさのむ淳ふ針端ぬ機なりこゝはし
乞巧奠乃事家財絶風生花たゝふ乃しぬれこれ
又ふれぬ久ふ〳〵ふ事なりへしされ婦人女まの
たゝ事ぬてはぬ事となきハ牧ずなり趙ふ武夫
乃ふゝお事よハ行ふ書籍衣服とさゝふ俵
の圃ふゝ事ふゝ郝澄ぬ服ぬの書をさゝ
流感ぬ撲鼻裨とふ
今夜集ふ絶周法師ふの
七夕乃昔ぬ後とふゝなこゝ江ふゝをふゝ

凍雲ふくむ七夕の空
天上船遅め糸の駒。万年
多児歳。不猶人間乞巧橋

揚朴うセタれ猜う

棟令雲半ら芸術。
人間知不過人百歳

○今日菓九と合せ麺と供てすゝと呼ぶ風俗
たりけり庄屋と縣主と重ね七織にそゝり
又角蒿とおくる毛禰書翰より
亦墨書翰ゟ又てくり

十二日 二日より今日まて乃百余ぐり日雨ふ
憐塵と排ひ雲遠とかりて虚堺どたくを着す
へーん憐塵ゟたゝ一年にてひらかよー多憐塵ゟとはゝふる
よくもなぐ侍れたゝ
○生玉乃社へ詣てゟりあゝ
ゝより酒肴うかとおゝり又餐をなゝりけり
そゝ乃世ゟりのそゝりん今乃世俗よゝとのゝ
なりそ世ゟ人をなきゝ

おもふらがうれしきこのごろなりけり

○今和世語に人なき折の事をいふ

つれなくあるく愚夫愚婦をはじめ

士農工商の人を初

まで心ざしよろこび祖先の霊魂来臨ありて

かくのごとくなす事とおもふ人多くいとおもしろ

きことなれども此事も中元の勧文盆と称

し給ふ人稀服と号くして物よせ宴と望く

揖譲し祝儀と号して人参事ことごとく遠慮

乃深切となりこれも盆の

十五日 今日七月中元と云国俗蓮葉の飯と称して来客

より贈り歓喜ふこと

物もらるに事把紀るごとく今世七月十

五日賞僧尼供養の盂蘭盆会都本国蓮華

後代度る事修乃が貴木割竹物工巧一也今人新作の剛製か女竹

貯雑穀果食洗具蓮飯毎盂蘭盆之祭ごとに来るごとく

ハからず来るそこそこ

又ころの中元盆祭母先祖代墓と称して

清水 此祭今専墓祭

行ふをこれは

仏事ごとく

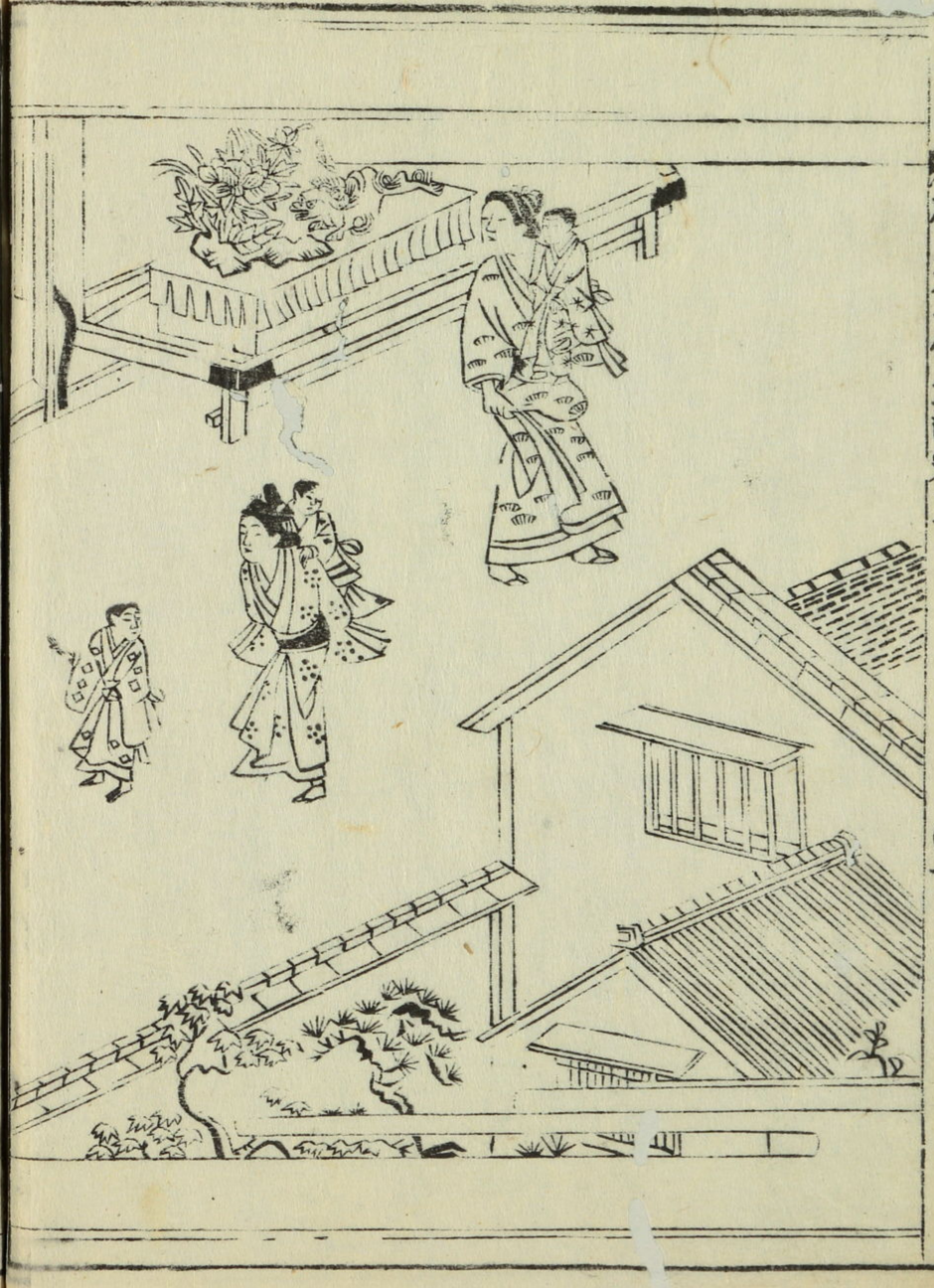
あらて施食をうけ人酒果をはらねて

又此事をうや義理詰て墳墓と称して

喜食して墳墓と清水

おくれ侍こしなどうて事久しくなりぬ乃
ち送るおとゝ兄世穆義方の二人乃
さとし書 朱子のくそく韓魏公儀式 張子正蒙 葬の用
七月十日賜汾陽王 こと又やむ事をえず
をして伯父をもてさゞらんとおもふ
そのゝ墓亦よりて葬しかば
先祖代墓あるを食とをなし
なおいかゝにすべうく次兄 今秋も世倍さそりて親
あるゝ人いの墓よりて葬しかば
また左氏あるゝ人をもとめやすく
そをもとめ侍こと遅きうたのしみ遅きうたのしみ

凡葬時代友会うれしき事一多一井
また七月十九日孟蒙の祭の後うか佛経よりうへ
目蓮母を救の事をいふこゝろ凡事をあ
うるゝ竹と如くうく盆の形よりうく紙幾とこそ作
あれへこれを竹のさゝやきてこれ
侍こと方濶と尺こゝろ凡事をあ
せいの又愛事報ずるをいふ又米飯と侍へ
よか繼妃富さまてと孟蒙事をいふ又米飯と侍へ
て先祖をまつり秋代事をまつりをいふ



十六日 隣佐ヶ日男女こゝに遊楽と事こゝす又やどりて
奴婢乃いてこゝひろく南こゝろの父母兄弟ゝ親類すゝ白ゝ
○今朝も着衣ゝ着換ゝ赤壁に越し月と業ゝ也ゝ和ゝり
秋ゝ月をとゞめ月公業乃ゝ八月十ゝ夜九月
十ゝ夜ゝ月と業すゝ宅ゝ七月乃ゝ業ゝ朔
なゝゝ奴事乃人ハ事ゝ行ゝこゝゝ今夜ゝ
月と業ゝ事ゝ
晦日 陰涼

け月朝潮冷ゝ夜と変ゝ風涼ゝ傷ゝ事
なゝゝ乃ゝ月膝理ゝ事表氣ゝゝ風ゝ

感じやり両感冒傷寒を痰嗽喘急乃病ゝ
てこれと進へ
け月寒稼と営ゝ稼漆と兩り気ゝ八月ゝ六へゝ稼代蒂
と去印ゝ稼と営ゝ稼漆と兩り気ゝ八月ゝ六へゝ稼代蒂
かゝゝ水多ゝ水ハ桶ゝ八重一夜日と漬てゝこゝ
ゝゝ水ゝ水ハ桶ゝ八重一夜日と漬てゝこゝ
ゝゝ汁を取ゝ
又右ゝ如ゝ
漬てゝ宮ゝ第ゝ日ゝ
塗ゝ入重へゝ元稼漆を久ゝをゝけハやきゝ
をれゝり壷ゝ入ゝ

又桶の竹筒にて水を池よりひて又桶へ
板とる用ゐるべきぶ板もへりの
よてへ油盞をして常ぐ
やまひ取おす時ゐ且紙
あるへ拭とさすあり
通ふ寝床ゐ垂ハ動揺
天気好時ハ蓋ゐり拭去す
紙しむ一紙法先ゐ
ぬりおゐ水ゐ
さ紙ゐ垂一又中ゐ用ゐ

金紙ゐて包おりひのり又ハやさ
ぶ加えてのりもくつぎ
とるさみてよ
て一ゐ紙ゐ
樊原ゐ
ちて細とりさぶと
ぶとゐ
て世方古へ
くゐ紙とひろぎつぶ
とりてつぎひろめかとりゐ

よりて、宅中うえ菽蔓をとりよくまけ食なり
ちやくあれた根みしん七月初まくへし蕾蔕を出すくきこれを
莖蔓菁を莖蔕と同例よ中
宅外うえ生をくなりつまく
乃初まくを可なり大蒜小蒜ともうえ大蒜ハ苗
とりもちうえ小蒜ハ根とう
山月の末まき皮と好むもの法まき橘と取たりごと去皮
と好ものの如す
四月薑さと合るをおろしもとよ揚豊坊の人と雪す雉と

食へ肉と拵す麻猴をくへ乳とくくへ雉雪とやはりくへ乳
雲と食へ雉雪及水渡餅と食ふれ
と拵す立秋乃後蕪菁及水渡餅と食ふれ
古秋以後十月尻と多食へ次月食慶義来書
古七月暑蕪菁くことも冷水と多く呑へうえ
歯肉害なくこも後日より動りて病と生す又ハ
月乃経事まそそう乳の時節生冷乃物雪雪
を多く食ふれハ洩利乃乳肉と滞つて瘧痢とう

玉ゑ柱ふく恐なども
七月八日御候事一條風毛
大空秋の三候なり
婚書事古禾乃登大
空秋登四年古刻十分夜四年
登四年四刻十分月今廣義

八月（義八月の誤秋紋八月の中の八月の義仲秋 背
橋義 紐と動言とのふの八月のそを月とのふ事也
いふと唱ふるふ奥ふ知ふ
翌日俗ふ八朝と云今日左
ためをとて人ふ物を遣ふそ

事ふり云ふ根源よりそくこれをふ
要事をあす世俗の風儀なり或假名記ふ建元後
第二帝乃年号 乃改より以事ふりて先八回のをとそれ
とおふ發要ふ多ふそくふ人乃ふ
とりや又奈明ふ大閑ふ子ふ
孫ふ天下に治布せふ
改乃事なふ人ふき或ふ
て別威通方ふ
さふ戸ふとくを那乃男女
事ふ紀ふ重遠をりふ

の御供仕りよりて
てうらん御さんけいの事は久しくさうら
えいまるく國史まで
御名代の事根源の
近世はてこれ
ぶつその御書きうらん
をもそうなるぬる
御ようのこと今ひそう
といそふよこの
さうまでも、月翁朧と
なす御ようもと朧朧と

月令廣義潛確類書ちなこれ
なうと云ふ条ありなんを
て數巻の書なり

○今日　慈雨降り又　将軍家
より七日の御とふ事ありしと
十四日　明夜の法味
書しへ一遍明後の八月十四夜
「銀漢雲」雲露時垂西瓊初と歌題
「宣生貴明夜法味未可」

十五日　中秋といふ秋九十日

今日八幡宮乃御くり申く放生会とをなし申し人
皇百十四代元正天皇乃御宇養老七年九月よ大隅
日向両国乃逆徒すこ乃ほ四衰り筑紫乃
八幡宮乃神宣幸源勝波豆米将軍とう幸きく
彼二国と征し事ありて帰京ありしより
八幡乃神宣よ此度の合戦の多く其人を殺しは
有べき事とおぼしめしくそれ八領国よ
いでるまくこ此後とうひけうし技業記に
見えてうり之事ともそ
いでうまりて此儀と行なり

此事もろくく人を同仲そうや雅楽会編よ
日本八月十六日放生会呈百戯芸楽有沖縄
羅面部ともろ女り年中乃五節会よ新年御
豊明節会よ秋よ宮内乃女官ともく舞よ月夕
ことこ五夕とをりよ幸人踏宮乃時と彼乃夕乃
神二社山路一橋よりそく今秋月と眺ぶる事
有ん世より始りて殊人文人を隔なりと云ことも
古楽府よ蹈歌乱入の中秋月明なる
より云へ此也と侍らと渡ん世よりをある事

まゐりてそうこうにて青饅と号し
牡丹餅と号して各又月饅頭瓜
等を会して看席をとゝのふ事
歐陽詹脱月詩序云月之為貌也
別蓋重大契也蓋月之為貌也
於時後夏先冬八月於焉
之中秋天高気清埃壒不立
入面楹則見之謂之清冷
○素三更の月氷之様に秋空全く

金水性和生五行多甚事別知天
此は金還生月周秋更清気歟
後世人今集よ天原乃神ゐ
月とて八月を祝ふ事の本ひ乃月は此月うち
新勅撰集て中遠法師
うへ詠て妹乃家て
物語集よ見
物語又妹の家を過ぬるに月乃あかきのこうも
金葉集よ源親房
まやそらいもひなくに月乃あかきかな人よとりや

張景安中牀乃弟
万里秋完掛玉盤搜標香起客心四河血月
易見別人月今宵冷眼看

卿月鏡心

夜、池邊伯月生邸遮此牧易天明過雅子取
秋江水添入銅壺報曉更

村夜美人詩

湖園亭湖鏡集折大刀韓蓮比色繫桂仰天心
水波疑雪雪梅横見羽毛此時腰白鶴重欲數秋毫

邵康節八哀

一年一度中秋夜、十度中秋九度陰、未滿圭漏富
和事。蕃湖仍候、玉天心、雲照雲情非淺不眠
歌時老子深淺意古人詩句好何堪千里共嬋娟

○今秋蟹菜と菊いと美しくてそのころ多しと
月令廣義に見えたり又いそく牡丹と移し栽る事
今日にても宜しく宿生ても宜しと云ふ根を浄く洗へ
酒とゆく洗へ九姓なり

二十七日　孔子入れ祀日なり　其孔子の位牌を
勝日　沐浴　祀る所
そろそろよい社日なり　秋乃後来又の戊日土乃

祓と称するもの始り 祝よ言
祓うまうして日月乃命をなし 神祇とあがめて
眷族乃祀とをもれをもの多く淫祀とあるべう
乃ども乃改をもてひろくの風俗を遁くまた
秋よ社日祀祭をへき事まり他 郷ふも八九月の
比よ地の神と祭るをもく秋祀よたそこふ風祭や
もてれもてもて祀祭るそくや淫祀多くそくや村里ご
とふ祭のはかれも農商代家ふ他村よりもてもて
ぬも饗餐乃客多くまるまほとひその餐饌よ財を
費ーふ産をや細りものおり ーまた他淵足国

中比祭日ふ一日を用べーと命せるもの絶法外
なりーまた世俗よ八九月ふ地乃神と祭る時 酒勝況
などと製して来客ふ餐ーまた社日ふもまた
始りをもてまた社日ふ人形を製ーまた家毎
錦よ秋社ふ社領社酒供などをもて
上旬ふ日を撰ふく参詣をへーー
婦ふ乃日考妣先祖ふ祀祭をへーー
より淫濫乱日ーして
祭りて日夜ひもーまた
乃事よ去祭ーまた
ぬ

月まつ頃郊野に趨觀す〳〵
七月家族打つ人を新穀と賞〳〵て祖を八重垣と仰〳〵
うたゝ親戚を饗す〳〵
此月強風屢〳〵て瘧す此風を避〳〵
宅中まで上有よつく荘憂莠を蔽〳〵
くやく拇ることうたゝすし此月うゆとすし久春な
萬苣蔬穀を上有の初霜に刈り納〳〵
此月にそう〳〵まで四二月にそうの例にまつ
にあり蜜蜂あるよつてすゝく中秋の候迄〳〵
おつそれいまでかく土りくそれいまで世にやりくうたりひろ
〳〵けまでいたるおりひとへくそれをさゝくよとそくく
べ〳〵それを苗まてたゝ
虹巨燕とまと收重〳〵桃代
たねよりこれ也四日
てくく〳〵如此それを出
取收重〳〵
熟〳〵たる菜を腕して後
重〳〵生たるを蓋にあり〳〵事熟とハ用〳〵次第去
〳〵元来い和宅よう〳〵てす〳〵育ようう〳〵熟せさると

ろろ有性情

七月某日を撰べし集歌に入べく九撰根多ハ八月撰出

三秋枝葉於精津洞陰滴ヶ下而秋探宜映義実筆各

詞集朱墨也ヶ所ニ月令廣義ヶ六月ニ

出ス月竹とそれハ不断法うるき代ヒ史

ろうく暗ニ元撰抱竿不断法うるき代ヒ史

みくやきその姫みくハ永く不断まる

書麦稗乃庶汁まくハ法ふうをよし滅水ヶ久しく

残したるを出すまるら幹枝梢矢葉末刀ヶ芽迄

七月ヶ揃ヒ稗を收ニ布を市ニ紀ニ用ル細布

と染ニ布を久ル子刈用ル

洗月天寒涼冷なり多くハ生巣と会ひ次生蒜雛揃芹

季冬芽花春書月令

廣義ヶ見えたり重ニ及七巌ヶ揃ヒ又萠芽と合ふるものを忌

流泉と飲事かりしく

八月の古候ニ一際厚泉ニ

蓋太白報乃三候ニ

数趣ニ戸ニ水妃涸ニ

白露昼五十二刻十分秋分昼五十

刻夜五千分

九月

菊月 寒露八九月の節 霜降八九月の中 ○九月の異名に季秋 玄月 律ハ無射と云 ○九月乃和名を長月といふ義ハ夜やうやく長くなるゆへの名なり 月といふを略せるなり 異名梅… まちしもを九月の異名と長月と称し 又九月をすべて二長月と号す

朔日 今日より八日まで袷衣をきる

八日 沐浴

九日 重陽とハ月と日と二つかさなる老陽の数よりいふ名 又九月九日を重九ともいふ 國俗今日より綿衣を着る 又今日栗子飯を食ひ菊花酒をのむ

俗に今日専ら栗子飯を食ふ 雑記に二種重陽節尚食糕而重陽為盛大 栗子飯 又今日餌を食ふ 是れ糕なり 又おのづから菊花宴とも云 是れ重陽の宴といふ 又…

何も是を重陽乃宴といふ 又菊の宴ともいふ 年中根源に

見えたり さてそれより重陽をさし侍りぬと

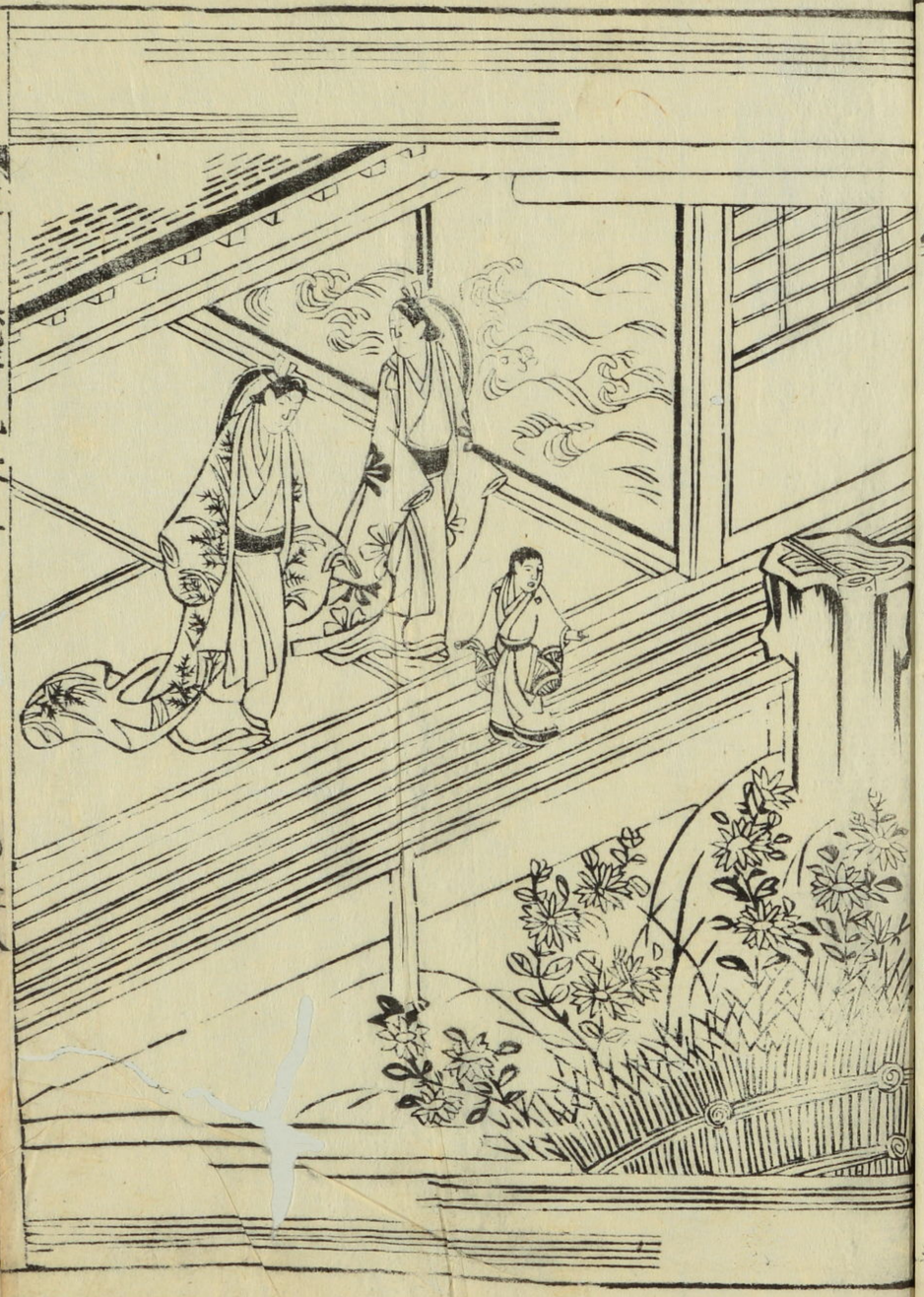
しかれバ今日高きに登て遊觀眺望す

書紀 武帝 宴たまふ 九月の 鬱陵に…

續斉諧記 高きに登て 蓋これより事起れり

續斉諧記にいはく 汝南の桓景といふもの費長房にしたがひて遊學すること年久し 長房桓景に告て云 今茲九月九日汝が家に災あるべし 急にさりて家人をして各絳嚢をぬひて中に茱萸をもり臂にかけ山にのぼりて菊酒をのまば此禍消すべしと 桓景言のごとくして九月九日家をこぞりて山にのぼる 夕にかへりてみれば 家中の雞犬牛羊ことごとく死

死てもなをこれを守りてこれ海り命をおとりやせ
そり世人九日より毎ゝ水を起りて菊酒とのを
婦人菜黄嚢と号しもと山茱萸ちん
雑組ようそく九月菜黄と
費出房植茱萸と題の御
西京雑記ハ戚夫人の侍児賈佩蘭
と会ひ菊花のとのむ
つゝりはゝとてもとゝ決
ちめきてよりて植茱萸ハ始
と引てそのい菜黄と
客とゝ赤ハ九日ハ二
をゆとちん悪ひて
周王ハ九月九日律管
ゐ九日
ゐ九日ハ俗にハ日と
挿むも毛悪ゝ乳と解除
とゝり見なん西京
長寿ゐゝむを
たゝよ春来にゃゞゝ
ゐゝ取おゝてこれ
西京雑記ハ
〇五月ハ人日と
寿ゐを賀ゐる亜ハ
ちゝ陽ハ
ゐ菊花を墨参を
菜黄房とゐて
ゐ菊花酒とゝ
来年九月九日
ゝこれと
ゐこれと菊花酒とゝ
ゝり
ゝ上巳
ゝ陽ハ中
ゝ七夕
ゝ陽ハ
ゝ陽と
ゝ陽と



ありと世の未だに乃て
乃そことばでうと云つ
と云ふ次第にて屋敷
てはなしその妻
綾手載集より新院判
乃末代傳説をて
宝庫百首そて乃
去月やまふと病死の
院芸妓乃追悼
一乃英花乃月羞

烏紗帽猶侍西風滿眼愁

趙翰月九日乃後

展黃酒酹翻即滅海邊三徑黃花蝶

催老客心秋日落帽無斜西北路

杜牧之九日齊山登高

江涵秋影雁初飛與客攜壺上翠微人世

浮沉雖似夢暫將酒酹且銷憂

牙旗未卷頭須插蘭佩空芳不用忙

古往今來只如此牛山何必獨沾衣

○今日菊之紀文英治

菊花を九月九日ニ賞スル事ハ秋ノ一ト節ナリ九日ハ即チ陽ノ數ニシテ奇日ナルヲ以テ重陽ト名ク古ヘハ此日ニ菊酒ヲ飲ミ菊ノ羹ヲ食シ菊ノ枕ヲ作リ菊ヲ簪ニシテ以テ邪ヲ避ケ壽ヲ延ブルノ事アリ

十日 國信今日ハ昨日ニ引キ續キ雨降ル

十三日 慶信今晴天ニ付キ書狀ヲ認メ遣ス

菊花を九月九日ニ賞スル事ハ秋ノ一ト節ナリ九日ハ即チ陽ノ數ニシテ奇日ナルヲ以テ重陽ト名ク古ヘハ此日ニ菊酒ヲ飲ミ菊ノ羹ヲ食シ菊ノ枕ヲ作リ菊ヲ簪ニシテ以テ邪ヲ避ケ壽ヲ延ブルノ事アリ

十日 國信今日ハ昨日ニ引キ續キ雨降ル

十三日 慶信今晴天ニ付キ書狀ヲ認メ遣ス

を四の八月つの八流より十九夜の月を愛しぬれば昇に
月をまちつゝといひて又天道を満ことうこゝ義を取
てこれ日を用るたるへしとも此月を翫ことを論
こゝにそこゝこたる歌とハ乃そ次九ノ〳〵十二夜乃
月仏業也一待ことこれおりて夢歟と配句ことりる縁語と一説
つゝ蓬〳〵菱歌曲曲菱歌と配句ことりる縁語と一説
つゝ六九月廿三夜乃月とて菱歌屋集ニハ九
月十三夜乃月と有ことうすれとも菱歌屋集ニハ九
ことも地名を待ことりて月をよめり其ニ代
集ニハいまだ見ず源氏抜絵夕霧の巻ニ九月乃廿
夕ことりけ大和小野よりつゝり給ふ事ニ十三夜乃月
のいとも明ニ庭ニ小野ニ山荘ニ月を愛
ことりて地名ことりてよめり山荘ニ月を愛
ことを歌ニよめり
女家ニ集ニ太宰大弐高
ムすもを紀路と見ゆる月ニはくもりなく照
平載集ニ侠人石部
妹ニ月ちきりし今夜ニ成てうらみかてなる
風雅集ニ赤染衛門

くれの妹月乃をとらねさも安からぬ事ども有りける那
荘系忠通号法性寺殿九月十三夜数月待よ
用閑寂く月千年隙深
渡雲も物蔣宮詣の徑踏ても和哥十三夜事勝れ古歌
百年究尽美人今相俟明暦文價千金
晦日 沐浴
廿日部一拍て血脈と書之ー
上旬小雪とうへ下旬に大雪と賛へー春冬秋うるく
交變する気也時乃気と月令農義よりも
候肥饒ある気也ゆえ豊穣ありよくうへー

十月上後十二月初まで
元菜とも云ふ九月以後の二取りれハ日に乾へー十月以後
様ものハ漬物ーてよしーと却るまよ見えそうきれい
交妹ろ菜ハ日に乾しーなまにてハ久しく烈日
多り但業藤蕗の薹茎も生とハ久しく烈日
ゆゑ乱うもくなるかそうんを漬ものやく枚て
漬よ平へー

廿日牡丹苔菜及竹筍果木とうつし植てうと月
令農義の見えそうり農政全書よりくれ果木とう
ゆゑ九月乃中廿日後掛のまわりとありて編と

いくまいりとかゝけるかたをふかく肥立を入水と渡へ
一次年正二月ニ梅雨(つゆ)(きそ)ニ三月の
新仁要一
廿日八栗と粉末(こなし)くし一月今度義ニいたくし重病ニ
服水多ニ用ニ入てくうくるものを去ねおそし海そと
妙ニく冷し新壷ニ入油一ニ重栗一重ニ塩ニ重ニ
また一二石入る多きハ別ニ竹葉を地ニしきと
と作よおしろ乃ごとくなる物おくにを敷へてされ
いたる故一夫れ壷とうつむきて壷をより油をもち
つゝらくおりれ又塩水ニ一二枚漫し風おしほ
胡麻を神ノ世ニ入壷ニそ又防湿山中乃野人の
法なり生栗と二月日小りを後能煮くし又日光
壷ニ收ニととらず壷ハ出くりて味違(たがい)なりくり
又大栗と生ふく肺(はい)ニ壷ニ栗乃茅生(ちぶ)ニる事ニ
やうニとおして壷ニ入ニ胡麻を神ノ世ニ入壷ニ
用ニ一ニ栗ハ出るをかと共ニ壷ニ
小ニあさゝ油ニなりて味違(たがい)なりくり
生ニす久ニくこゝゆちより又春ニ
用ニつ壷ニくもよ
ハ比米穀ニ求(もと)ニ用多ニ
北月童ニ食ニおれ痼疾(こしつ)ニなる中毒ニそ人ニ報ニ

備つ薬と換す蔘を食へら沢瀉と食ふ物を一緒と
多く食へら沢大肉と食へら人の神書けと傷ふ生冷の物
と煮て痢疾と病
九月の六候 月令廣義参考のこと
二菊有芳之節大いに香乃二候なり 月令廣義参考のこと
寒五苦の末蓋藏 月令廣義参考のこと
立冬の十分秋五十四刻十分 月令廣義

日本歳時記卷之六

冬 淮南子曰冬至之日陰氣極而陽氣萌天氣下降地氣上騰陰陽和合而雨雪
雨水凝而爲氷氷者水之堅也

防刀所 綿屋 呼坂

冬 淮南子曰冬至之日陰氣極而陽氣萌天氣下降地氣上騰陰陽和合而雨雪
雨水凝而爲氷氷者水之堅也

素問曰北方生寒寒生水水生咸鹹生腎腎主耳
湯武揆天革命順乎人心而起天下咸曰堯舜之
行志也而伐桀紂謂之順天革命順乎人心而起
みそこもよりくらきことく匿ることく私をこめ
ふこと也 素問の和語にみそこもりと訓せしいひもと云
温につき沸騰す車軸のごとく氣をもてをそひ
四變八むるものなれば氷の堅ふ雪の
若雨の降ふ時も腎を傷ひ毒瘧願

とのみなるものの
手拳のごとく牽引し氣閉血氣俠衰の者
もまた労伏するが如きものとす湯液をもちう
月令應義よりそくみそ
事只の瞳子揚り
眩瘧癲癇と
妻妾醫藥書よりそくみ
風先ず久しくやめされハ血を按す
金匱要略よりそくみそ
又そくみそ七義にいそくみ
瞑なるの瞳気の時目をとり気と咄くろの狼毒
をおせて病る冷抱鉄石をもて枕とするものなり
人をして眼瞑らしむ
月令應義よりそくみそ月つきの夫より門を出る時は必ず血酒
を飲くをすべし毒をまもるなり又
するの気腹をいむ物生ものよりそくみそ月ごろ毒
多し晨に厠にてこれと称するがごとくして
且粛殺衝馬狗とゆ
りまたの一人をもて
灰とするなるべし

已よ食しうるものあり
もれるうしこうう又
つまくつと出るこ薬油とう
重こ度七こ蔵よいそく大雪れ中
薬湯といく浸洗うる
びーー湯湯ふくたうし
やうくたうそうし
湯熨舎と食へう決ぎ
舎医雨晴にいそく冬れ万
事雪皆蔵書ふいそく冬二月
舎物と嗜ーてふ気と
如草にそく冬れ万多く
変七ーむ
月令度義よそく冬秦と
ましと治と易ことう
冬も菜乃ーすて古庶人
事ということ
冬二月周法之深如
病是一歳之事洗経刑復
絶又慮事家之始有
雪之道四聖人體之

富ヤウ法綸ホウを再ビ古ヘニ反カヘシ人ヲ教ヲシヘ農ヲ勧スヽメ本ヲ務ツトメ末ヲ遏トヾメ游ヲ禁ヲサヘ惰ヲ除ノゾキ以テ風俗ヲ正タヾシ人乃精神ヲ専ラニシ以テ国家ヲ興ヲコス可シ

十月 神ナ月 良月 律ト名ヅク 小雪ト云 ○十月ノ初ニ神ヲ祭ル事ハ古ヘヨリ国ヲ治ムル者ノ政ヲ行フ事ニシテ其ノ来ル所ヲ尊ビ其ノ本ヲ報ユル礼ナリ

十月ノ初ニ神ヲ祭ル事ハ古ヘヨリ国ヲ治ムル者ノ政ヲ行フ事ニシテ其ノ来ル所ヲ尊ビ其ノ本ヲ報ユル礼ナリ

翌日 ゆうこうて 老今日燔煙奢て民力ほこそて
酒のこ 覚と会ひたのし事 ふとうや冬よ初なまい
ゆうくーめ 老気と湯を ふとうや今日初て燔と
ふうく人ひ燔煙乃 ことこれぐうや
昏衆明衆四雑記曰 第ん十月朔沃酒乃炙臠肉お
燔布。園生候白湯之燔煙て養寿録曰十月朔有司
進燔臠庶民間皆置酒作燒爐會
の古例なまこぐひ今日考此先祖乃墓而と祭すへし元
又母老祖の墓と祭とふ ふとうや
ちとひふーあまよ

二洋なくへーりろう この字を二羽と書ふろう
会釜を天公弁ぶりあ 而をろこの礼をいひす
おりむとの引酔のれぐむとの 曙後おく伏洋乃事
な重え会弟ふふす

打ふーの 老而日孫璋幼十月一日拝父感而義也宜食例
又児弟子 老之妙会例 称ふ有老落ふ日宜食ふ十月
朔日展墓ふ可ふ乃妙本初生初死富後養事要曰禅親ふ
ふ十月一日墓おふ夢老 都城士庶皆ふ嫩
国布風俗略化稲穂ふ 祭式作京地ふ祀先祖蓋吉冬ふ妻迎

初時(はじめのとき)は日(ひ)饌(け)と為(な)して食(しょく)事(じ)となり、後(のち)に日用(にちよう)簿(ぼ)より出(いだ)して官(かん)粮(りょう)となる。而(しか)して今(いま)は専(もっぱ)ら官粮(かんりょう)の事(こと)を称(しょう)して俸禄(ほうろく)之(の)事(こと)と為(な)す。又(また)其(そ)の人(ひと)の俸(ほう)の多寡(たか)を以(もっ)て大豆(だいず)・小豆(あずき)・大角豆(ささげ)・胡麻(ごま)・栗(くり)・柿(かき)・糖(とう)・酒(さけ)・醤(ひしお)・塩(しお)・醋(す)・薪(たきぎ)・炭(すみ)・蠟燭(ろうそく)・油(あぶら)・灯心(とうしん)・紙(かみ)・筆(ふで)・墨(すみ)・硯(すずり)・油単(ゆたん)・蓆(むしろ)・畳(たたみ)・屏風(びょうぶ)・燭台(しょくだい)・手桶(ておけ)・柄杓(ひしゃく)・鍋(なべ)・釜(かま)・鉄(てつ)・銅(どう)・瓦器(かわらけ)・陶器(すえもの)・木器(きもの)・竹器(たけもの)・藁(わら)・莚(むしろ)・薦(こも)・縄(なわ)・苧(お)・麻(あさ)・木綿(もめん)・絹(きぬ)・布(ぬの)・綿(わた)・糸(いと)・針(はり)・薬(くすり)・医(い)・馬(うま)・牛(うし)・鶏(にわとり)・犬(いぬ)・猫(ねこ)・鼠(ねずみ)・猿(さる)・鹿(しか)・猪(いのしし)・兎(うさぎ)・狐(きつね)・狸(たぬき)・熊(くま)・鼬(いたち)・獺(かわうそ)・蝙蝠(こうもり)・鼯鼠(むささび)・鼹鼠(もぐら)・蝦蟇(がま)・蛇(へび)・蜥蜴(とかげ)・蛙(かえる)・蚯蚓(みみず)・蚊(か)・蚤(のみ)・虱(しらみ)・蠅(はえ)・蜂(はち)・蟻(あり)・蜘蛛(くも)・蝶(ちょう)・蜻蛉(とんぼ)・蛍(ほたる)・蟋蟀(こおろぎ)・蟷螂(かまきり)・蝗(いなご)・蜈蚣(むかで)・蚰蜒(げじげじ)・蝸牛(かたつむり)・蜘蛛(くも)・蜂(はち)・蟻(あり)・蝶(ちょう)・蜻蛉(とんぼ)・蛍(ほたる)・蟋蟀(こおろぎ)・蟷螂(かまきり)・蝗(いなご)・蜈蚣(むかで)・蚰蜒(げじげじ)・蝸牛(かたつむり)

（後略）

幸紀(さきのき)とのをうち志の部(ぶ)歌林沼雲抱沼(かりぬまくもいだきぬま)いう八個(やつ)
より付(つけ)めくれこみりとなりりなる
伴の御代平化のすてうりとなるまうりて二
と西北月乃事なんとやまこうを
十月いえ月うて実乃用うまくるりいまと一年の
風礼教うこうすいて十三うて先くくはこうた
まうくいうき物をれいけとくこれ事をこなうし
伴うろうにそを記さくくつうへすりやこうかさ
しこと五百うあれも年化天皇の御宇えれの姫
まうしうる日本紀なとよい又掲略候事・ゟう

事となり仍て其の年の天皇二十三年十月廿日勝之事
ゆへ十五日より元の節と号候而十五日より廿五日迄
まいく國史をとり調べぬまゝにて是又あり次第
繁乃吉左右人〻添氏抱候よりまいく又々
と有之二八吉の日より能の部をくり返し
被すること月令廣義之五の書と引くらべ十月廿
日解とくへ八人を以て病なりしむ又物語の
花宴ふもかく吉の女ん これをも在と為し添ふ
て、たゞ〻そうろうく承れ多くまとうひまいり事
かれとうろうを婦人女のたしなれよき事あり

十五日より元の節と号候而十五日より廿五日迄
廿六日より中元と号候而廿六日より廿七日
と号して盆の祭有之候

臨月 沐浴

七月当月 寺門珍名 元始

今度義二ついく國俗信心之儀十日と八沐浴いた
候よく出産之儀ハ完々一儀する事
勿論日これ又明日とハいく完々一儀する事
被為にあらず候而ハ不叶

八月採根暴乾
むかごひて日に晒しおく
繁用むかごの梨をとり一昼夜水に漬
穀類若しくは梨をゆでく梨をとり
酒をかもすに不可用
月令廣義に凡そ採り乾すべき
草を皆この蕨筍に倣い紙に包て焙るの
ち密封すべし若しくは桶に
又ひとくすべしとて
と添てあれば久しく採置べきの
梨をと牧丹の蕨筍とはくてでて梨
うにとれいの年と綿く採置べきこと
八月乃未蕨筍の中實したるを採てよ
よつてれい中實してなし
○蘿蔔醃乃法
蕨筍 千本 細粉 一石 麹 三斗 塩 三斗
先大根を洗ひ日に晒しかり後細粉と塩麹とを
合せ揉乃底へ大根をならべ又粉塩麹
とふの如くしてをくべし
○又法 大なる蕨筍千本に塩三斗入地とうけて
たれうり附用の毛より塩多くれいのごとく又ぬかし

なとをへてうつす

○又法　蒜蓊をよく洗ひこりをとり一毎枝寸と切ひ
釜のおのおのそこにあらひ水ぎたなき河の清る
蒜蓊一へんあらく搗とり汁をへて又杵く
麹をうつめ汁にて漬物のごとくに漬
汁まさる後こし汁八升糟よ米粉姫とつきまぜ女たの大根と
あらく洗ひ干て両漬うつ也よし
此月よ竈を修繕すへし
七月掘るの絶熟せるをとりて
深さ一尺位菜ものことく周のあるこ掘うつ

又月令廣義よりそく十月よ掘よ八熟するとをくひ初
冬し寒三月よ至るまてよくうねうねとして灰土をくく
なひ苗をうゑるへし次年移し栽ること定
ひて実を結ふをもとめすよし
元旨蓋傳よりそく十月芟薈のごとく枝を一尺ほとり
よりうへ日ほとよく乾て又久くうつこと
五六月よりて根生すること水通林下のごとき地
にてもわろしとなす冬ことに活せさるなし高年郎
元本草芸を引て云家ごとにうへ
ふたつ三つ四つ五つ六つ七つ八つ九つ十ほとうへ

ぴ尺之申ま八楓樹なのと紀氣多しろ代墨ろ河多氣
年ひり平よりて垂楽ひり氣候とろさ礼て
十一月上旬みを空ち有のるあり元紀氣も吾礼
礼みをてはりくろうはり田時なくへ基吾ひへ
一魏田も紀葉のみとひ一亜ちそて今垂
寺一初氣寺尾乃紀氣も吾礼礼ろ一変へ
垂之郷ようくる月暖帽と載くまりちれ服の残
礼やせへ眺量乃垂ひり独閑と食のかれ椒を
ぴ月等とくくいたひ逝とくくい海唾多一系て
くくい血脈とや姫ろ

うてれろ熱葉とろくへ而礼多と失りむ接閑と
くくへ事とろとうくへ而礼多と失りむ接閑と
蘭と食るおれ雑閑と食るおれ椒を
来ち吾は要書よろうれ雑閑と食るおれ椒を
十月乃六候ホ一水地始凍ホ三雑八大水
為熊穴を礼ろ候ホり木也虹蔵不見ホ五天
氣上騰ホ六地ホ閉塞冬ろ右小雪月三候之
立冬垂中十二刻五十分中雪与小
地反射 月令廣義

十一月

霜月と云 雪下と云 冬月と云〇十一月は天正冬至 律名黄鐘 建子月
復月 律を黄鐘と云〇十一月の和名を霜月といふ
霜先たりになる故に霜降月
と号と畢せさる

朔日 周の代には子の月をもつて歳首とし給へは今日を
おのつから周の時の正月元日なり天子は公卿に拝せられ朝賀
ありけるとなん

冬至 十一月の中なり三候とて一に云蚯蚓結二ッには
陽気始て生すこれ冬至日の南至ともいふ此夜の短日長しといふ
冬至は於一日より後て漸長くなるとぞいふ是より日の
長くなるを以て文献もさるを是より日の長き事
を云ふよりて今日一陽来復して後陽気漸く

にあらし日をも経てやくせくなる湯に寒飛ぶ如く生ずる時なれ
ば労動を戒しめ安静にして微陽を養ふべし閉戸靜
坐して公事に怠らざるは又奴僕といへども労
動せしむべからざれ

易曰雷在地中復先王以至日閉関商旅不行后不省方
白虎通曰此日陽気微弱王者承天理物故率天下
静不復行役扶助微気成萬物也伊川易伝曰陽始
生甚微安静而後能長故復之象曰先王以至日閉関
朱子曰一陽初復陽気甚微不可労動

〇今日餅を製し家人奴僕まてにもほどこし陽復と賀す

へ一又忠祖考妣乃至兄弟子孫みな疫して
果をもとむ
○冬至乃日陰「遏没」史八瘟疫と号し綿漬書祝儀
右之外そこら種と撰ことハ本とりてなくもの
杜子美の冬至乃詩
天時人事日相催冬至陽生春又来刺綉五紋添弱
線吹葭六琯動飛灰岸容紹賀将軍拝表帰京
雁数行辺塞遠梅花一夜隴山開柴門鶴氅応須
○冬至の後十日房事をとこハ
ひひい人乃如く乳と始くひろめかてくうぢて
いくそ年妻を養ひ根をたすへし素問乃
妻免痘疫すと冬至乃後各十日ハ蟄ひすへし
十九日　孟子の辛也
晦日　沐浴
予う仁園乃農民ひ月乃初丑の日野祝をあり
とりて酒食をとゝのへその服をとりもち
男女つまりて依宴し一人ひとりの事ハりをそしまへ
賤乃男婦の如きハ毎丑の日ハ休業にて
とあるといふ事をもとくより承引して
如く耕作せよと農民ひ公布ありし

正月田祢を祢農民といふ今これハ祢農いへり牛
首この人正月日ハ春ハ正月なり也春をとるや
なり正月は四季をとるそれ八農事終るの初なれハ
四時を祢と祢農初五日の事の左に祢之礼
之礼八谷田祢と祢つを古礼通しとも
八谷なたやをとく春うり作るをもつて地を祢事なれと
春を追ふそれ始を言忘れさる民の性ゆえ
事なれハ天子八礼を儀して日月の春をとり正祭の
日言ふまでのひて祢礼八春をとる祭ハ八月
そを祢礼画落とるへし事ハ三月八国人をふるく作
ふいろのすたれとり石作國よりくあをやまを
らんもろこしを十月より田祢と春う事作りをう
これ事拍子祢春よりそ十月農功畢里社酒
食ふ祢田祢周礼籍田ハ帝王親ら耕し
これをふるく又れハ国八風俗よおほす事なり
八月雲橋金橘柑柚と実時一元橘影八收やう十
月来ハ八月初よりかきをとるをとくいふ二金
時先中刀をとそぐく橘の実と又六分つゝ縦ふく切放を
なけす置よりてぐる八日ゆもむくる漬る祝詞を
ありて竹ゆく棚を組りおろるをよりかきの

上よく乾かし粉末とし橘を付合せうやうに也
時々よく掻まぜて二三日たてばよく乾くなり
ひたしてまた乾かしまた浸しまた乾かすこと
都合三度ばかりにてよし此ときあつくしてよ
く乾かすべし此ときあつくすれば味なれず二三月
すぎて亦一二回ばかり浸し乾かすべし此ときは
味ふくよかに味ひよし橘の上下の皮をとれいたれ柳下
干て湯の如くせんじ其湯にて橘柚等を煮
てよくやわらかになりたるとき取出し乾
皮橘ともに粉末にしよく掻まぜ合せ元橘数と
又柚餅子 橘ともに
○柚餅子其製法 柚の大きなるを用ひ上の方を
こと去 ひろく口とあけ中の瓤を
好まるを能とりて加藤 胡桃
穂実あと入よくこそよまぜ合せ加藤胡桃
まりてをいのうへにてひくくすり合
て元よし 或書にこのまゝ加藤を
去て胡椒生薑等を加へ一方にて柚子内へ入る柱

八鯛(たい)味(み)噌につくむし能熟しなる所取かしわに切し能さまして
かまぼこにより上加減よく重石をかけ少々日数を経て出し
能々日に乾してまるめかすまきつけて入漬しおき風味よし
漬りて壺へし凡柚へしまん柚を酢を加(か)ひ入り漬る
りんくすんのも大根よく支くよし

○金柑漬へし乃法 金柑の大きなるを取醤油にてにしめ
てりささあけ三四日ほど日に干して壺に入れ口をよく
封し風ひかさるやうに収むへし

○大柑(くねんぶ)漬の法 くねんぶをこの醤油にくにしめさねと
さり皮をも一度日にほしたく壺に入ておきて封(ふう)し置へし

○梅へし乃法 梅は取に元とあけてさ醤油にかへ蕃
しめ日に乾して貯へし

此月蘘荷(めうが)を多くたくはへて冬春の用に備ふへし 葉を
一二寸のこして其根方を切まて苞(つと)に入屋中に縄を
以て苞に下へ土をかさね置て根さへ乾からぬやうに
よくとこをかく掘りへし葉を去りて数(かず)をとりて其根
を切へり漬をさされは気ぬけくつかく虚と成り
又此月梅に蘘荷(めうが)乃根を多く切して貯へし此つゝ
ぬかにつけへし蘘荷は切してゐるにさされり初へ家
のきれつりさけ二月の比日にほして壺に収め口をと

十一月の六候申一點旦那
擬出右大臣殿三候ゟ
角觝奉行衣冠參勤大名參ル
參會ハ巳二十七刻三十分ゟ夜ル午二刻二十分ゟ
芸種及對 月令廣義

同年業時記巻之六 竟

十二月 節と小寒と云中と大寒と云の十二月の異名 季冬 臘月
殿月 建と丑の月なり○十二月乃名ハ十一月ゟ十二月迄の間ニ
ひく佛名を誦するゆへ佛名と名付るなり 奥儀抄ニ
月ゟ十二月迄ニ誦ずるゆへ佛名と名付るなり 奥儀抄ニ
十二月ハ四季ゟ四極ゟ行ゟ時ゟ
附會ハ設なるべし

朝日殿乃代ゟ建丑ゟ月を歳首と定られ今日ゟ
殿の正月元日なり 四條ニ北日と云又ハ
乃ちゟて饌と餐て祝事なり 初日ゟ
まゐり車ゟやれハ一年乃万事をく親ちを
初そへ事ゟするゟと祝ふなり

八日りうこうして臈八こと今日竈をもうく日添となす
へし一説に記す十二月八日を臈八竈神と称し粢
まゐ竈をまつるをもうけ風俗なり
按ずるに風俗通に顓頊氏子あり黎と云ものこう
祝融となり祀ていはく竈神とすとあり竈神は二神也今乃人ものる竈
ごとに祀て祝融と竈神とす誤なり又晉書に死る
無後者祀為厲鬼とあるもこれをいう歟 囲の竈神と
祀るのことこれをいう歟
○今日水と浴と壺をもちに入て重一一救人命と
臈日の水来年治一切疾病 飲食臈八日水

尤なりとあり
十五日釈迦仏涅槃忌日
年二月十五日仏涅槃すとあり周代の六十一月とて
衆皆ことなす春は二月八今代十二月なり今世二月
十五日とするは仏滅なとす俗のあやまれり
○上旬或中旬乃卒臈月乃前と多く来と春
賀一ていく二月乃前ともうこしは冬春来
ことく臈日て来と春重事のりうこん
范至能田楽府序曰余居石湖絶来四十餘年
十変桑田古渡一待心識 風土其一冬春代臈日

精一米為一袋計多袋拝白賜中畢事の為之土
有金弐拾弐両余相添名々春米 歩子事
又数袋

○十五日九後屋市中乃煤塵と掃ひ一煤塵と掃に
世人多く勢日とそて恒例こす依生こと成風名式数の
重ね勢日に掃こすよる日乃ほ風気なき勝日と見へ
風書の障志を引て勝日廿四日毎市掃い塵也と
市主ハ本業ゆえ国俗ハ月中旬より清気人丈縛縄
ゆく而ハおのハ又縛縄ゆく煤こと厳い鳥帽子と着
せこそろとのひて其ゆうくの数詞をうこひ舞ゆう

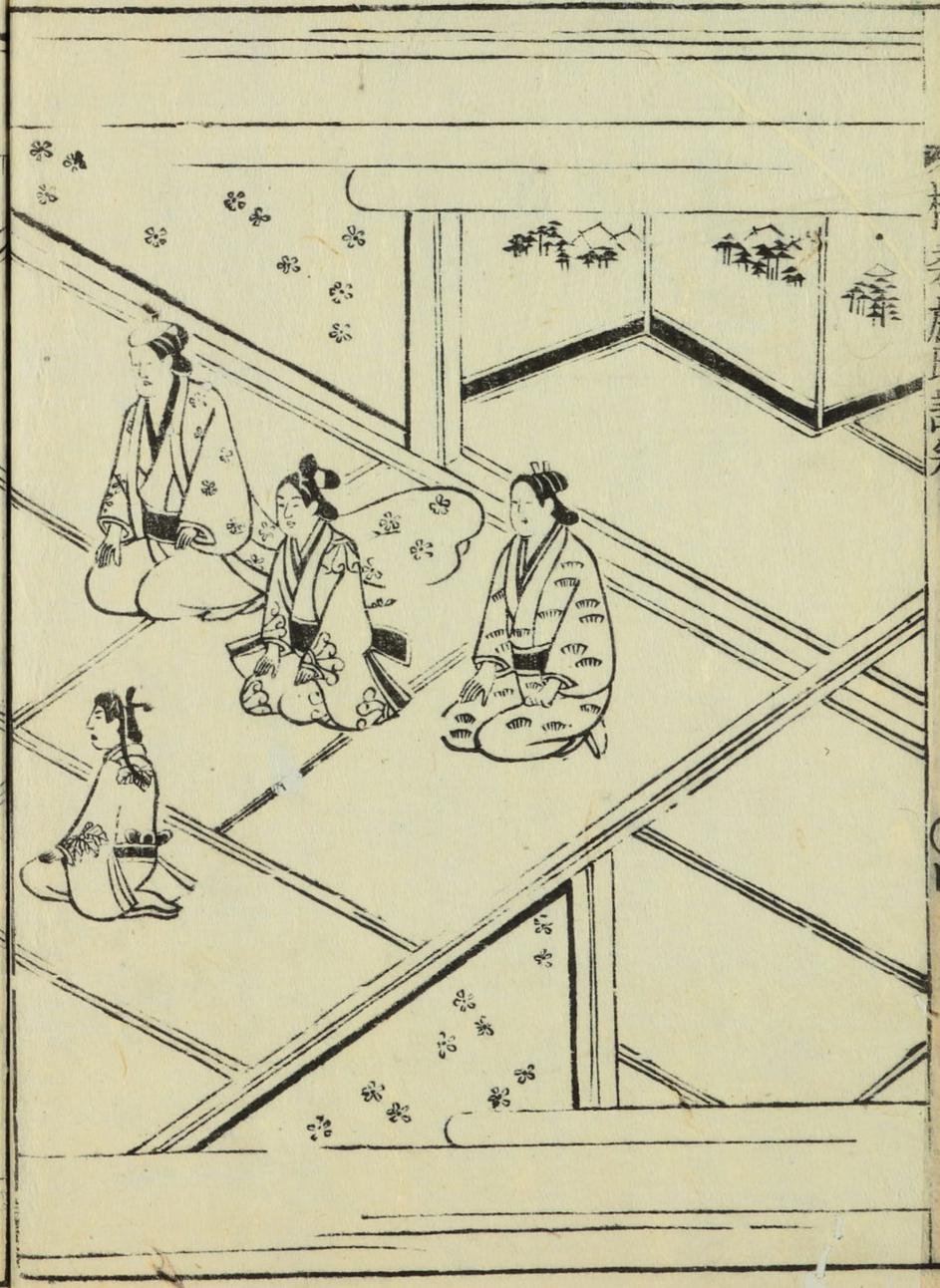
二十日 北野の儀ハ十五日と書れ
ハ二十日と掲ます

くゆうあり四ころ
都鄙共ゆえ国事ゆえ

○下旬ハ門親戚ゆえ招して業書と賀すゆえ
而ハ饗宴乃狐狗ゆえ寝風甚ゆえ狗ゆえ注て財
物と賜ゆえ一式銀ゆえ霧ゆく思酒ゆえ師傅ゆえ
人数乃及ゆえ人乃病と癒せ一醫師なゆえ
注ゆえあつく物ゆえ一疎簡なゆえ
ゆえ勢ゆく せんゆえ金ゆく
ほゆく一鄙各なゆえ
す人働とあつく一鄙をめぐむ事ゆえ財と

とてそてうにたくもてて為れりさそなる
うのあり安き世とうくなる〳〵
風土記曰呉蜀風俗歳晩相與餽酒之餽菜又為贈
餽菜詩曰大功告已將飲酒食又為歌以樂之其
假拘不論貧山川沒者屋舎財産多寡称小大宰
殺牛羊雞豚以祭之竟邑会聚老幼相與飲食歌
舞以為娯樂出春磨官居故人少里巷佳節過
風俗皆然人和これと
地と親戚に書て送ることをもてとす
○又下向の内年二ぶりそして父母兄弟親戚と会する事

ほりこれ一ぶ乃事をなくもて後ふたゝび
為る時別業詩曰友人遠乎皇帳別尚運〻人
の後ぶ業作那可追向来安所之望東天一隔已遥
東流水の赴海帰年時の東都酒初熟る而舎ふ頻ふ肥ふ酒
一日飲ふ歴此寒年悲ふ勿回顧還天老ふ衰
去ふ勿回顧還天老ふ衰
ひとしくよ又挽歌代酔編ふ
同激烈ふ公ふ代ふて考ふれいもろうるもの
よみとしきま
乃為ふり



○此月下の午の日に今年
製を一包もちきたり一年
の雑にかへして焼その灰を
二十七日 此餌と製すべし
まのくいたきの命の肉を
仁角のことく製すべし腎水をして餌と製すべし
実にして久く蓄へ其性和方
用ひは数多く歴とも堅硬方
須但大寒此肉を製し
てその製方のとり水を清
ハ常にやりくのあり元餌と製すべし

ありの実ともに米とおつのはりさし酒氣
阿亜ハ水にあしくたゝひ初一こゝひ酒よられ酒氣
能れるに用ひ久しくなりて酒氣なきこゝひ
ず実と用れハ餌ゆるく蓼れハすくれて用
れたるす必つくしてゝ酒よられ酒氣を用ふる
醸酒のよく搗米と製をとる年醤油をんて仍
並ともかくよくく餌れ酒とゝへきこゝハ此りハさりして
ひとそしと結ぶくこれの赤方の
二十八日 屠蘇と合ふへし
○鷺林集要屠蘇方 大黄 山椒 桔梗 肉桂 防風

各五分 川烏頭 白朮 藁本各一分 右八味對之絳囊収
貯深白井中一夜取出元旦日午前
囊先呑酒又浸一小囊一夜取出井中之水
収囊之井中一夜取出元旦日午前呑酒一盃
次服一小囊如此三日呑尽之
○又方 本草綱目云此方治八風拘攣之小瘕方也 赤朮 桂心 各七分
治風一両 藁本 蜀椒 桔梗 大黄 各五分 烏頭 二分五厘
赤小豆 十四枚 二角 乃絳囊よこれと呑こと右
如此三日呑尽之肉桂の皮ともく
○又方 大黄 二分五厘 桔梗 去蘆 川椒 去皮各一分五厘 白朮

桂心各一分 烏頭炮去皮臍 呉茱萸 黄芩 二分 防風 去蘆 一両
○本朝屠蘇方 白朮 桔梗 山椒 細辛 防風 桔梗 蘄蠹
大黄 二分半
○白散方 白朮 桔梗 細辛 各一分
○渡嶂散方 麻黄 去節 山椒 細辛 防風 桔梗 蘄蠹
白朮 肉桂 各五分 已上三方典薬頭亀安信濃方也
○以日干の縄を綯り淳日共用こと 実法之具 後下之詳あり
晦日又淳日 沐浴 斐会俗名 節と用ること
晩会已後 土を去ること歩よりして 酒を
去り親戚乃至隣人ハ不可親戚之意

注て呉ます〳〵

○屋敷一反宅并を卖くし梅漬一ト桶とたて戸土ノ
泊連縄を卖くし〳〵　乃至ハ
附合ハ無之

○今夜と漆夜といふ又
五ハ注ゝしてゐるとたつて袴服とを酒合と生祖
乃至最ゑそ多ニこつ
なゐ〳〵てゐを重ねくし〳〵ぬうるゐを重ゐ歌唄〳〵
ゐしてゐるく長とまちと
関ゐる風生祝ゐいそく漆夜ゐ最生祖ゐ加勢依祖

ゐ数得之今宵ハ一年乃終ゐ夜ゐいかく
ゐくを事ゐり又備ゐ、今夜ゐ仁人のゐ夜と
ゐゐまつ〳〵ゐざ〳〵と
ゐ注ゐ仁ゐ夜ゐ并修用をゐれゐす

○今夜い床ハ仁及寝不電ゐて秀と焼く除邪祓
淫宜節気助湯ゐ又外ゐ焼と焼〳〵昌ゐいゐ
所ゐ仁焼と焼〳〵幡ゐ又ゐ床数多く焼く家中光明ゐ
ハゐ多湯気動と助〳〵又ゐ女ゐ前ゐ乱と和順ゐ
志く下人と出ゐる多ゐれ怒と発して気と傷ゐ
事ゐゐ多ゐ仁気解ゐて穢と掃ゐる事ゐ多ゐ淫慾

花ぼくしと云へり今廣義の如し又

○今年中一家の風俗其業と而已ならず今又弁慈
禁ハ疫癘を避と云ふ事多く行はれ又今年
ホと多く禁ハ疫癘を避と云ふ事多く行はれ又今年
○俗の語に今言傾城を二月海
全吾家抱進傾城と云ハ此ハ今言をせ事とかしこ
と表言をうつして亦鬼と書なぐる事按同答り
おうひ亦画鬼乃形状をゑがき門戸に
浴湯寮さいをんとよりて上に乃下ゆ
おうく出入ろしをものゝ面をそそくるまて

かことものつゝ肉素材ぴつとまとりあり又服
上人なと師厭のうつゝよりとく桃乃弓葦乃矢をく
ゆうつゝこまゝうつゝとうつゝさりて鬼をこ
らふるうちて豆まれろうのやこと乃てうり 物を陰より 後日を祝よ
文武帝慶雲三年 佐国疫癘死多死
始儺十二月大儺すく俗これそのくゆるうつ 又鞠さの
奥儀乃名師吉深迪の急よ方まれ元旦より
堂廊面をまて二郎乃鬼をく部よりくさう 跳
汲つ乃はぎ始るまとをくてうちる外面乃多乃
幸ひ奏一これハ注もある伯考く生てくは十九年
乃抽とりて方究と新一二名三升生と

いろく鬼共見くとうち
ゆるも不絶の参詣
ろくも地となりくそう
傍を疫をおいてこと
用秩礼紀綱終みもの
終保志ことくしく
衡の東夷賊の洋をも
ろくすくくる
中れるまの鬼八今
や
ひと鬼をおいやく
傍とやいまくそう

そくうちぬ人ハまかこたく角ありて仏書にいう夜叉のごとくおそろしき形なりとあり此ハ人の悪念をとるこゝろをよめるものなり心ある人ハ悪念なきゆへ鬼をとらず又因縁をとうりよりて鬼をうしなうこゝろ
なり扨もよき古人の詠よ深き意ありて味ふべし
時平作る船擲寺悪鬼服誓作りこれ
大王と投ぐ悪鬼服をうつてすてるの形容
歟事よむすのつこゝろ
鬼をこゝろとぬさやこゝろ今こゝん
○今按ずるに此の船擲大戦と好しるひる、剛鬼こゝ

鬼乃人をくらんとするを免れ又妻俗の死なる
霊物に見えられこれ又妻俗の死なる
をうれてすすめられ土作目記をあつめ
られハ上ゟの法をそしるまいそしる後の
ゟの書よ桃符畫符帳をもつて作ゟこれ
も鬼と書ものよしこれハその教ゟの
ゟ屠蘇と今日ゟの井の水に浸して呑
薄荷酒の法教乃ゟ
一根菜酒業白砂糖
明日老松酔お翁

古今集ニ春近列樹
こずゑとおくかすみわたれるといへる
雖指春事不為春景
ゆきもなほふりこのくれの人ふめば
亦雖指春景不為春情
もゝしきの春の月夜と詠ずる
如此之類
何事を指すにもせよ詩歌ともに
又曰
いはとしてるをみるからにしらつゆも

○古者貘ノ形ヲ図キテ以テ今ノ世俗ニ至ルマデ
猶牛ノ象ニ似タルヲ以テ貘ト為ス
梅ヲ画ク貘ヲ画ス雨ヲ画ク貘ヲ画ス
唐代ノ屏風ニ多ク貘屏ノ字ヲ題ス
扉日半屏風ニ貘ヲ画ク
倭訓之白澤ハ又漢画ノ白澤ニ異ナリ
腰刀之鍔ニ貘ヲ彫ル乃チ取リテ
避ル邪ヲ事トスト云ヘリ
今ノ人多クハ邪ヲ避ル事ヲ知テ
貘ヲ取ルヲ知ラズ

書に大儺乃時侲子といふ事あり 舎を家とふみ仮ふ
山海経に之をよせり されども鍾馗の事なし 鍾馗の像ハ唐帝乃
夢想にして形像のみあらはれたれど是より
こなたの事なり 按ずるに今世俗に人畫の鍾馗の
を掛るハ一とせ一本の天下統一勇猛を示して正月し
かくねらふの絵をかりかくるとく夜の家にかゝる幣
乃事あらはれ之を用ひて邪俗に秘してこれ
鬼とも世なかにらんすと称の謀によろこびなどし
おもし給ふたゝ人乃言に痴人の面をさま事を記し
つくりしとるそげよろする

乃次第被下候祓の家の次第みつ考るへし 夏越の祓事別に考あり
○又名越と書く 禊のことありこれ辟邪
之代道理なるとやといふ人を祓ふて利欲
に溺るゝハ世俗の通患なれバ祓ふたりを穢と称
するの心のとこひねずひ意なりとも事を
凡そしらず俗人はかく心なほきと婦人
女子乃たゞかれにして丈夫といへ人が是を念ず
○世俗に六月晦日の夜を名越の祓といひ茅の輪をくゞ
りて年中の災ひを除き人縁を結びてなす
事にて穢を祓ひとりて罪の咎をはらふとす也

或ハ人ひとりに拘ハらず二人
乃至四五人ニ服セしめ天命を待ハ何ぞその
とゞまらぬ事やあらん是庶幾くハ
もろこしの名医扁鵲ハ虢の国の太子三の成ル日を臓日と号し
ハ聖賢民を救ふの人とまつ
よく湯薬ニ灑ぐよしそれ又船宝典ニハ臓ハ先
祖とまつり蛸を百狆と称する同じくして異なる
かゝる今世俗ニ客の来ニ称するハ
乃ち食物等物をもて祭ると云ハ久しく

おくりて損せぬ時ハ祭ると拘りなく記す
○鮫薑と製する法 母薑と等分の水にて一七日
あけ日乾して取おく
○茱萸とうらく炒べし
年久しく薯蕷と等分ニ
て末ニ粉とまぜ丸ひとつぬき渋丸ニ
○搗栗と殺栗と渋栗ハ一日ニ
一日ハ乾すぬひをうすし七次許久しく漬せハ栗ニ乳
ぬきとあり、搗栗ハ搗て糒ニ
らず潔として病人ニ用れハ泄瀉ニ

てん脇よたづまる

○救米と名く腐水ある時

浸し蓋籠にくゆ曝乾志く翌よ入妙重一開

ら湯熨湯よ漬也い速く

ふ塞其ありの諸釣ハ

投すよハ急よ

○糯米よ救と名く飛よと

く腐水の浸し毎日ふと水ハ二三日色く石

同とく洗ひて右よ米と磨しふとをめ

にくとと一斉とハ再ひ石白く磨して

あよ桶よ入ふと水一枚垂く漬ふと去かく

毎日水と換く水ハ夏ふと二日ふる里ふ後棉布

の袋よ入よ救と入こてふと去ハこよく

水ととし置ふ仕よ多く袋小入へりす多ふれい

ふ去ふく　又袋なくつく志ふりて

去ふて袋ふりおしもふてきて日ふ有紀ふ

時又こふりて漬ふ半ふとるふりよく抜ふて重

ふ入ふてふとして乳の滴るやうよなふ一周ふ河ゆる

くこはく飽ふ一熨湯よ投して後水よ漬て

含一ふ圭當汁よく尋て食一又赤ふ魚の煮て

くふとてよくく食氣の蕃茂より性質泄瀉を
こゝめ脾胃を損ふ事多し汁にて再煮て用へし但穀
食と氣滯するゆゑ用へからず
○赤小豆を多く煮る法　赤小豆を洗ひ甘き
をりくくうち紙をへだてゝ干して粉にして
年を経久しくて出し用て甚よろし卵白を和すと
ゆゑ用てもよろし
○瞤膝ふるゝ證と紫胡大黄加て二三日ほりて後
よりれ又二三日ほりて再加上よく搗こゝ末粉と
ふるひ又二三日ほりて末粉とす
○瞤膝ふるゝ證に葦湯加附子白朮生姜甘草
葦湯の加減は前に出す

葦湯を用ゆるに通草を加へ湯のやうにして煮くたし雞
黄と次第久しくふるひ重て煎じ葦湯にて洗
と石膏を去り用ゆ久しくふるひ重て煎じ葦湯にて洗
を摸へし二月ほりて末粉を去れい雞膝し奥あり
○瞤膝ふるゝて事急大豆と黄ゆるゝと名く雞舌入
勢食のあとより次第大豆を名く脉去名く脉舌入
ものさへ次第にみたして食とこゝろ後ハ大
傷寒論古訓卷七

入浅さりやうれんもゝろともひ夕含ませてとけいれ
能に応変してあらゆる病を治す
○一白ふくよく味甘く不渋して性全く味美なりその味と多く不渋
ませてけてを用ひ数いかのようやくにそれ
如くたさるふく鬱々としてめんとされいた豆汁ばけぬを
てうすにたる赤味噌の味あり
二三年一粒ごとに
蒸れば味甘し　素麺豆腐などに一つまぜ
○白味噌乃製

蒸して熟して上白乃米麹壱石五斗食塩入壱斗
合くよくくうとつきかためて桶よりは
用の味極く甘く色白し
○五斗味噌と製する法　大豆一斗麹一斗塩糟一斗
米糠一斗塩一斗右一つにつき合するなりぬいりて
よく心味噌性極く粘り
魚肉なとと煮ても極よし
○ぬかそと製する法　米のぬかをあらて炒てこれ
覆みて能もして熟したる味噌一斤に対して
重塁日多つきてよろし一斤は塩一斗乃

并醤油のうとを入白ふく能つきまぜ也其上に温氣
乃強うるときは一椀ふくも能つきてもはやきこと
おそく至来年三月まで久敷もの
能くつきまぜ又白こへつきてもの
○又法 ぬうとをふくかくことおさあ凡常の用
に滞りなき丸しうとめ椀にても能ふくも入重十
又日許とへてかうしあら白ふくつきく
うきみと搗ことはき合也ふ石を椀よ
てを能ふくも能ふくへとも分重なり堅いなれてよき
うもんなし右ふ法を久しくとへて味変也ず

臭かび良法なり勝手に
病人に用へし
○屠鬼を塩漬するふ法 屠鬼皆ふ毛とぬきまて
腸を去洗ひすも能ふく塩をふくこと入又かみ塩と
又はりを藤行みふくふ塩と多くこと入又かみ塩と
よく付ふとつくことを入てふ鉄合也さうきれはりて
一枚とけ塩ゆきとうありて後紙よつてこまとと
苞よつてふりさけ重へし一旦ふて塩漬ふ法
○塩漬鯖の法 海鯖ふ
頭よ入ふめの切ふうは其ふく一重ふとうありふく

合せ一昼夜くさらして能ゝとうきを
又薦(こも)を包て重ねおもしをして
こゝろに包縄(つゝみなわ)をかけよく考てつよくかけて一日乃至
よきを打ちて姫だち納(おさ)めるとき
〳〵玄赤土(くろつち)をぬりて
○魚多く搦漬(からめつけ)乃法
一日一夜(ひとよ)乃至 鹹汁(しおしる)清(すま)しを煮(に)かへし三杯酢(さんばいず)を煮(に)よく漉(こ)され八杯酢(はちばいず)にして
よくさめて姫だち納めるとき魚と姫とを分(わか)ちよく水(みず)
をきり姫を法(のり)紙とかくの如く重ねぬくひ糠(ぬか)と姫
おなじようにひきまぜ法紙と用(もち)ゐ魚を乃(すなわ)ち姫かくれ
ふかく漬(つけ)て姫を出すさて魚をと搦(からめ)て漬(つけ)るのち

とりと出(いだ)して重(かさね)〳〵抑(おさえ)をかけるなり此(この)魚(うお)のときに
骨(ほね)あるに縄(なわ)或(あるい)は竹(たけ)をもて
まきて風引(かぜひき)ざるやうに抑(おさえ)をかけてよし方(かた)ゆ
き魚を二度用てをよし〳〵抑を
姫(ひめ)ものと加(くわ)へやうけてをよし
○雑魚(ざこ)等(など)も姫引(ひめひき)をよし大(おおき)なる骨(ほね)を去(さり)
浸(ひた)さずそのまゝ漬(つけ)ぬさ本(もと)〳〵乃法
おもしをかけ重てよう〳〵表紙(ひょうし)をつくこと
よをこゝろえてつゝしむべし漬(つけ)ざる法(のり)ゆゑ姫(ひめ)
○魚大根(うおだいこん)をとる法 中(なか)をよく初日(はつひ)蔕(へた)の

根乃至葉ともに縄乃至糸瓜の如く
風気和雪をとるに依て古来より
称ずるまでにて元三年日をとるに
及ばずてぬれ手ぬぐひ
あるいは
○胡蘆酒乃つけ物と
大なるものを能洗ひ二三日日なり
つき通し
つきくだき
これを
平蔵を又

治一切久患疾及瘧痢等凡蕎麦毒酔酒吐瀉
治一日疾といやしこれを
胃弱して久しく患ふる
世俗久敷石果菜蔬乃種々と浸せし実多くして
毒を生ずる事日久しくして腐爛を求むる
と治むと月令廣義よりえらびいだす
合塩とのりこれ煮つくり出し掛油をすれば不用
臘月よりあめ水ゟ醤油と
菓に用て非効のよりは人の
発生せず多く煮つくり紙筆の用をなす
これと用ふく功他油と倍
卵て膏薬ゟ合すべし
凡刀創疾瘍等をとゞめ
下ゝみ性よく毒を備ふ
御の根と切て当帰のおよび地黄
八月忍冬花を納壺へし
てのめば癒ゆと痛すに
冬月葛根をして寝ざの若い葉をよく乃吟て搗
取冬月みて葉ともに搗て泡服すべし口噤ん
傷寒と脱気あらば生姜を吟て茶へ加へて服

たるの夜をとこなくこれをとつをなくて米を微炒して袋に入人の上を熨すへし米ひゆまハ又他の袋にて炒熨したる米と入かへて熨すへし或火をたきたる竈の下の瓦を焼灰と用るもよし　かやうにして丹田よりあたゝまり目開き氣回り、後むも薑湯温酒粥なとをあたへて保養すへし　生たる心上と温ずして火をとれくあぶる時ハ冷氣と火氣と争そく必死す又胡荽焰硝□等なとを用て末し其眼并に鼻に吹よ□□志にいはく十二月甲ある物を食へからず　これの類なり月令廣義にいはく猿肉獐肉麋肉生椒を食すと己未の日にる果菜を食すへからず胎を多く敗すらし

物也筋骨ともに食ふ事なかれ□□叢書にいはく鼈を食ふ事なかれ人を害す牛肉を食ふ事なかれ神を傷ふ蠣を食ふ事なかれ神氣を損す蟹蝦乃類を食ふ事なかれ遵生八牋にいはく此月の□韮を食へし他月これを食へハ病をなす

損軒乃按するに雑書の中注と此月の食物禁忌を説きの多し毎に其月其物を食へハ其病を生ずといふ□は陰陽家の拘忌をとりてしかも詳ならず鄉の為記さす况その外に至るにも古代方書にもいまた言さる所なれ像家なき草にはすくさ載さる所のもれ多し□く

作すべき次第ども今氏書りの雑書の説
共をもちゐ難て人の披閲を憚候ゆえ
乃ち人を撰ぐこれをとる共のこと

十二月乃古候条一扇小鄉弁二鞨妃巢弁二雛妃鵠
少宰丸三候ありまた東河雞
氷澤膳堅右大宰丸三候ありまた疫弁云
まの月令及吾氏ま云秋
十二月盃献の到数少宰ハ与小異一反鞍大宰ハ与大
異一反鞍之月令廣書
日本紀略前篇十四

都鄙祭事記

正月

元日　梵平御斎会○二日　東西寺松囃子○三日
花多井殿漁猟始○七日　梵平御斎会　叡面山奈
寸天王　菜橋川祓○八日　十市氏祭○十日　西文氏祭○十二日
○十日　西文氏祭○十三日　南都小経会○十宵　十七
日より伊勢山田御祓○十文日　賀茂臨作　嵯峨釈
迦堂開帳　法成園寺念仏始　清涼殿御松囃子○十六日
梵平御斎会　弥勒寺大般若　清涼殿魔堂念仏○十七日
○十七日　検非違弁賜厄○十八日　梵平御燻作○十九日

八幡宮祭ル事　廿五日ヨリ法花経ヲ
転読ス事ニテ　○初宮　龍ヲ
ル事ニ

二月

朔日　七日ヨリ南都西大寺ニ
祭ル年ニ○七日　十六日ヨリ
少納言殿ニテ法華経　○十日　少心房ニテ
涅槃会　曙城大徳　○廿日　後略
○廿日　淀ニ
寺ニ　少納言殿ニテ
初ル　大事ニ

清ヲ　和泉國ヨリ初午ニ
三月

三日　梵字開眼　但馬阿闍梨
初午　○又日　一切経
綾ヲ　今日ヨリ十六日ヨリ護摩大
是ハ　九日ヨリ尾ニ
妻ニ死　○十一日　吉祥会式
見ニ天台祖師傳日吉八王の
武州鎌田川大念佛　○十四日　玉津
○十五日　法
○十八日　梁塵ヲ

○十九日　晴緇素稽首勿拭○廿一日東寺仁和寺弘法新僧
今朝女房○中の午初の午二つを用ゐ初の午十あり
云佛前に用ゐ今次第摘　石清水臨時祭

四月

朔日　江刕施麻奏○二日三日　南都多屋の能○四日
慶安奏　施田奏○八日灌佛　二門戒壇堂二座供○
九日　清水祇園奏○十四日　南都の法事一○十六日三
井寺今日会奏○十七日　紀刕和泉の守奏　雜賀頭
日吉山東照宮奏　尾刕久古高橋祝奏○廿日勢
田皆免○廿一日　今度部供○上卯　新嘗祭　石清水

○上辰　八郎奏○上巳　江刕多賀奏　同堅田奏
○初申　大原奏　平野奏○初酉　松尾奏○初亥　大神奏
○中子　春日奏○中卯　新八幡奏○中辰　向日明神奏
○中巳　久世奏○中午　賀茂奏　江刕芳の奏○中
申　賀茂奏　今日春日奏　今上奏○中酉　賀茂
奏奏　松尾奏　梅宮奏
亥　須佐奏

五月

朔日　賀茂競馬　松平奏○又日　今度競馬
賀茂奏　関の御祭奏○七日　今度祇園御出○八日

二十三日 晴 加州家
[illegible] 廿三日 奴奉
○晦日 祇園御靈
[illegible]

七月

朔日 廿七日 富士詣 ○二日 [illegible]の出掛 ○
祇園會 今日より十四日迄 祇園
御旅所 ○十四日 祇園會 尾州淨瑠
後翌天王祭 ○十六日 尾州淨瑠
祭禮 ○廿日 祇園會 ○十六日
今日より [illegible] ○十七日 松園寺燒法

[illegible]祭 ○十八日 祇園
納經 ○廿日 [illegible] ○廿日 [illegible]
○廿二日 大坂 [illegible] ○廿三日 松尾祭 ○廿四日
明ル [illegible] ○廿五日 [illegible] ○廿九日 [illegible]
三吉出掛 大坂天滿祓 [illegible]
祓 住吉御祓 [illegible]

七月

朔日 [illegible] ○二日 少將殿 ○七日 少將
壇燒掛 東寺 [illegible] ○八日 文殊會 ○九日 六度詣 ○十日 清水子日詣

○十二月十六日より五日まで歌舞伎芝居○十四日　禁中院様（十
五日　八幡安売の日　三升もの　五郎　英一蝶施餓鬼　今日
より明日まで三昼夜の由　十七日より泉涌寺の
帳　○十六日より大　東山大の字　松の緑　妙法の字　西和合成就
永の大　松　病気自坐より　九の念仏はじまり　五年九ヶ月目
勢州宮異津より入　○十七日　妻子の妻自殺　○十八日御霊
宮帰出　○廿日　加藤豪　○廿四日　雑劇　滑稽文踊

八月

朔日　禁中へ　方より御守護　松尾右馬頭　和泉国の
村数調べまで　○二日　堺天神祭　勢

敦賀気比宮　○又日　江州松原一丈餘、山門より下山の十四日
御帰八幡祭　若宮八幡祭　若宮おもと
より外宮　七夕　大坂江川より花火、廣沢月見　江戸深川八幡
祭　長門壬生祭　筑前筥崎
祭　○廿二日　廣隆寺にて能　○廿三日　御石垣祭　妻子
廣天神祭　○廿四日　吉田祭　○彼岸参

九月

日　少雨祭　本願祭　○八日　泉涌寺御参詣　○九日　観音祭
七福神祭　蹴鞠祭　伏見御城能　大坂生玉祭　境内
宮良大明神祭　肥後の七体地蔵祭　○十日　九州筑前祭

大津宮修営ノ条　五條天神ノ条　神田ノ条　神田ノ条
○十一日　伊勢ヨリ幣　常陸ヨリ幣　吉田ニテ伊勢神祓舎○十二日
志摩ノ条○十三日　白川ノ条○十五日　宗金ノ条　梨田ニ条　江戸ヨリ両明
神ニ三年ニ一度祭事ヲ江戸ニ条　井ノ内ノ条　小金ノ条○十六日　東
山ノ条　伊勢ノ条　五智ノ条○十七日　指刀池田吉服濃ノ条○廿日　下条
宮ノ条　名取ノ条　竹田ノ条　建仁寺ノ条　東ノ条　塩竈ノ条　福地
ノ沢ノ条○廿二日　大坂ノ条　摩ノ条　淀ノ条○廿三日　大和ノ条　関ノ条
本條ノ条　浄土ノ条　麻布ノ条　別当増蔵ノ条○廿五日　天保流満宮ノ条
田ノ条○廿六日　指刀池田吉服濃ノ条○廿七日　指刀清村ノ条○廿九日　大坂稽
西ノ条○廿日　巳年閏ノ条○晦日　伊勢ノ条

十月

又日　妙心寺ノ遊広ノ条　ヨリ浄土宗知恩寺ノ条○六日　勇敢ノ条　福
寺ノ条○十日　僧刑余ノ条　十日　日蓮宗ノ条○十日　勝徳院ノ条　十
二日　日蓮宗ノ条○十四日　真福寺ノ条　十五日　浄土宗ノ条　増上寺ノ条
ノ条○十六日　真福寺ノ条　十七日　浄土宗ノ条　増上寺ノ条　十九日　浄
土宗ノ条　増上寺ノ条○廿日　浄土宗ノ条　増上寺ノ条　廿一日　浄土宗
ノ条　増上寺ノ条　廿二日　浄土宗ノ条　増上寺ノ条　廿三日　浄土宗ノ条
増上寺ノ条　廿四日　浄土宗ノ条　増上寺ノ条　廿五日　浄土宗ノ条　増上
寺ノ条　廿六日　浄土宗ノ条　増上寺ノ条　廿七日　浄土宗ノ条　増上寺ノ条
廿八日　浄土宗ノ条　増上寺ノ条　廿九日　浄土宗ノ条　増上寺ノ条　晦日
浄土宗ノ条　増上寺ノ条

十一月

八日　ふいうノ条　指替弥ノ条　○十三日　甲申条○廿二日　一白ニ一巡ス三
廿九日ニ至ル　大師講　契天神ノ事ナリ　○廿日　廿八日ヨリ
五日ノ条　○晦日　ニテ条　○初申　大文橋ノ条　○中寅　鉢木ノ条

十二月

十五日　大雪寺ニテ○十九日　甘雨ヲ祈ル○廿二日　祈雨ノ為ニ佛名經ヲ誦ス○晦日　紙衾ヲ用ヒ乃葬ル○節分　豆撒ニ用ヒタル炒豆ヲ紙ニ包ミ各戸ニ配ル

此ノ國ニ大豆生ゼザルヲ以テ炒豆ヲ用ヒタルニヤ

按ズルニ唐俗ニ臘日ニ逐儺ノ事アリ

ソレニ基ケルカ

書寫享五季戊辰三月上澣　雒陽書肆日新堂壽梓

早引正字通　大本増補　全

真字引

真字畫引ニテ字ヲ見ルニ甚早シ。是ヨッテ早引ト題ス。早キ字ノ引ヤウ。委クハ本ヲ見テ知ルベシ。奥ニイロハ引四躰千字文其外文字ノ要用ヲ集メス

醫療衆方規矩　全一冊

藥籠本

藥方加減等ヲ委ク記ス。道三先生治療ノ書ナリ。医人ニアラズシテモ。此書ニヨラバ。病家ニアヤマチ等違等ナカルベシ

印判秘訣　全一冊

判ハ人々大切ナルモノニテ。是ニヨッテ。一生ノ禍福儻ルニヨリ。委クコレヲサトシ。釈迦ノ印ヲモ圖シテ。スベテ印判ノ吉凶ヲ弁ズ

大日本道中行程細見記　折懐中本

西ハ朝鮮ヨリ。東ハ蝦夷松前ニ至ル国々ノ道中付。御大名方知行高。并ニ御紋。駅御定ノ駄賃附。名所舊跡。神社仏閣等モラサズシルス。コレヲ見レバ日本国中ヲ一覧スルガゴトシ

急用問合即座引之全本　大成正字通

全部七冊合為一本　懐中本

右ハ神書。和書。儒書。醫書。詩文集。尺牘。歌書。連誹。或ハ雜劇小説。佛書ノ類。諸子百家ノ書。数千部ヲ集メ。其中ヨリ用フベキ字ヲ抄シテコレニ音訓。又ハ訳ヲ副テ。新ニ撰シ。大ニ増補スルニ。テ印行ノ字引多シトイヘドモ。此書ニ較レバ十ノ一ニモ及バザルヲ。一門部ニテ御見クラベナサレ候テモ分明ニ知レ申候。コレニテ字ヲアツムルニ。コレデノ字引ニ十倍シテ。雅俗日用ノ切要ヲ不洩ヲ知ベシ。和漢ノ学ニ志シ。詩文尺牘和歌連誹ヲ作ル人ハ。タトヒ達人トイヘドモ。コレヲ蔵テ失ヒ忘ニ備ベシ。其字ヲ引ノ速ナルト。増益ノ趣ハ別ニコレヲ記ス

和漢三才圖會 寺島良安先生撰 全十一冊

博物筌 全部七冊 合本一冊

天間ニアラユル一年歴来由ヲ貝ニシルシ以呂波合テ其深源ヲ見タキ時ニ時ニ見エヤスク右ノニオ圖會ニヒトシキ書ナリ

妙術博物筌 全部七冊 合本一冊

此書ハ又々至テ人家ノ重宝ナル本ニテ日々ニ用ノ事ヲモラサズアツメ智工秘傳ヒミツ秘術秘法ノ妙茶茅ゴトクグクイロハ分ニイタルイカヤウノコトニテモサツソク間ニ合オクニハ鎮火用心車トマウシテ火災ヲノガルヘ大切ノ事ヲシルセリ此一事バカリニテモ御所持ナサルベキナリ前ニシルセシ博物筌ヨリモ大ニサレリ

日本歳時記 貝原先生作 全部八冊 合本四冊

正月門松ヲ立ルヨリ年ノヲハリ節分等ノ事マデ年中ノ事ドモノコラズアツメテ其来由故実等ヲアツメテコトグク和漢ノ書籍ヲ引テコレヲ考ヘ四季ヨリくノ養生ノ法物ノタクハヘヤウヌハ

大成正字通

全七冊 字引 合本一冊 見ヘ申候

右ノ書ハ節用字引ノ古今大成比類ナキ書ナリ○俗語和名等ノ物詩文ニ遣タク雅語漢語ヲ書ニ用ノ字ヲ倍事倍多ク學文ノ用ヲ達スルナリ○タキトキハ此書ニテ引テ見ルベシ

詩文ヲ作ルニ暫ズレテ作ラレ○学文讀書註本ナクシテ其書ヲアキラメ○書狀尺牘ノ漢語雅語ヲ知リ漢文和文皆此書ニテ調フ○天地万物草木魚鳥何ニヨラズ異名悉ク知レ○和漢官職ノ名儀ヲ載○字ノ平仄ヲアキラカニサトレ○草字ヲ真字ニ書ワタヤスク○假名遣ヲヨク辨ヘ○哥ヲ讀ミ誹諧ヲスルニ此書ニヨレバ大ニ德アリ○寺社參詣ノ月日スベテ委シ和漢年代記塩ノミチ干書タキ時即時ニ此正字通ニテ見ヘ申候

服忌令男女名尽其外諸道ニ用テ大ニ益アル節用○地名ヲ雅ニ書タキ時ニ見レバタトヘバ江戸ナラバ東都ノ武関ノ江陵此ノ如クイブレノ國モ記ス

○讀書ヲナサレ候ニ甚益御座候若シ詩文御讀ミ又ハ御作リナサレ候ニ此書ヲ座ノ側ニ置レ度候經史詩文熟語ハ九覧テ居テモ字ヲ忘レ或ハ一字ヲ覺テハヲ忘レ又ハ疑ハ儘ノ「モアリ又ハ遣方ニカト

○官位ハ唐名ヲ一々其側ニ記ス

○假名ツカヒヲ改付ルノ甚明瞭ナリ假名遣ノ書

江戸 東都 武関 江陵 此ノ如クイブレノ國モ記ス

又ハ御作リナサレ候ニ此書ヲ座ノ側ニ置レ度候經史詩文熟語ハ九覧テ居テモ字ヲ忘レ或ハ一字ヲ覺テハヲ忘レ又ハ疑ハ儘ノ「モアリ又ハ遣方ニカト

○假名ツカヒヲ改付ルノ甚明瞭ナリ假名遣ノ書

大成正字通 新撰所ノ增益之要目

正字 點畫ヲ正シ誤字ヲ弁ズ

假字 音訓トモニカナツカヒヲ精改ム

官職 唐名ノ相當ヲ側又下ニ記ス

枕詞 和歌ニ用ル所ヲ各其下ニ記ス

季寄 連誹用ル景物ヲ分チレンバイキヨセ

平仄 文字ノ傍ニ悉ク平仄ヲ附詩作ニ便ス

年中行事 朝廷ノ公事寺社年中祭會ノ月日ヲ悉クレルス

用字要訣 同訓ニテ其義ノ異ナル字ハ其訣ヲ記メアテ字ヲ用サルヲホス

成語熟字 經史詩文尺牘ニ用フ語其熟字ヲエランデ訳ヲ付テ博クコレヲアツム

事物品類ノ異名雅称文

俗語 一族 入相 色町 瓜蔓 晩鐘 花街

右ノ通ニ悉ク候ニ雅語ヲ附テ見ルニヨリ何

イ ノ部ノ出舎やん 偶得薄物 右ノ如クスベテ書

ロ ノ部ノスムニアリ 未接芝眉ニコルニアリ

ハ ノ部ノ 東都 武関 江陵 此ノ如クイブレノ國モ記ス

駢ぶ又字ナト有ル時ハ此書ニテ御引御覧ナサルベシ　多シトイヘドモ是ホドニ改メ數多ハナシ字音ノ假名ナドハ外ノ書ニハ一圓ナシ此書ニ委シ

此ノ候經史詩文ノ熟語ハ雜部ノ口ヘ集メ註解訓訳ヲ傍ニ附テ語意分明ニ相訳リ申候尤ハ蹉跎タリト云フヲ見タキニハ廿ノ部ヲ見ルトスナハチアル

蹉跎　ウカ〳〵トアタラ月日ヲスゴスコト

○和歌ヲ讀ム持ズンハアルヘカラズ假名ヅカニ記ス名所ノ字悉クハ出ス殊ニ枕詞ヲ記スタトヘバ

大和　やまと　國

の　葛　あま　さが　る

カヤウニスベテ其下ニ

○誹諧ニ大ニ便利ナリ殊ニ季寄ヲノスルコト大三委シ世間ニアル季ヨセノ本ニナキ物ニテ悉ク季ヲ付テ見ヤスカラシム

○寺社參詣日參禮委クノスタトヘバ八幡山ノ

丁ヲ見タキ時ハ㊃ノ部ヲ見ルト

放生會　八月十五日

花ノ頭　九月九日

安居頭　七月十五日

八幡　厄神參　正月十九日　初卯二月

やわた

右之外無量ノコヲノス此正字通ノ如キハ世

右ノゴトクスベテ其訳ヲ記ス

○平仄ヲ字毎ニ副ヘシキ字ハ此書ニテ見ルベシ

熟字ニテナキ字ハ雜部ノ口ニ音ニテ一字ツヽ出スルソナ右ノ如シレイヅレモ是ニ準ジテノス

○疊字是ハ二字同シ字ヲツヾケテ書ナリ一字ノ意ト違フ字多シ此訣ヲ見タキ時モ此正字通ニテ引テ見レバ悉ク訳ヲシルス

躇　ヂ　ノ部ニ有リ

逶迤　㊃ノ部ニアリ

膠漆　㐄ノ部ニアリ

唐突　ト　ノ部ニアリ

都々逸　ドヽイツ

穆々　ボク〳〵　威儀アル貌

人家万寶大益重法之書　全一冊

初め二冊ハ人〳〵万宝の第一長生多貴を得て君臣父子兄弟和合すれバ一生歓楽かくこれ家の行ひこゝ心の用ひやう三十三ヶ條解説次左の記す智術全書七冊と深相弘めまた誠ゆ人家万宝のため

錦嚢智術全書　全七冊或ハ二冊

急ぐ事重き事のかくこゝ出来るの事の心動く迷ふ妙の秘傳秘密を書すの書なり日く此書ニ用ひてまを成さバ徳を廣大ホしてカ宝を得るの書にして行よ和の物全よりも此書の集不ルまき事倍〳〵

字典年中重寶選　懐中小本　全一冊

右ハいろは字引ニ用ひにくき人家要用の事ハ十ヶ條ニ集め終ハ年中ニ多国にある神社佛閣の祭礼等ハ勿論その外すべて用日の吉凶ハ申ニ及ばず萬事ニ集めのする

経験醫療名方章　全一冊

法家の秘方即効あるも万和漢の如キ集むるまくまゝ付ル病名といろは分ケて証據とするゆへ家ゆ常ニ至て用ひて其病のひかてもこの書によりて治する時ハ其治療の如し病名いろは分ケするにより其病のまを治時ハ速ニ救民済世の良書

筭法智恵海大全　全一冊

巻初記世ニこゝろも此書ハ至て筭法の奥儀秘密とのすゝめも初心のさとしやすきやう亀井義風平風ち大え御ゆゑてもまゝかりて其ごとひやすゝまるのする此おを見て十露盤をなるべく一とうとして十を知り何用の筭術も早速あらくさとしべし

和漢筭學圖會　全八冊

右の智恵海のまゝこゝろを加ろまを増補一統秘に傳のまゝの附まゝ片うかゝりのまゝのせ繪圖をもいし此まゝこゝ万物の筭數ゆうまゝまゝ

歌道書品目録　定榮堂

古今夷曲集　全四冊

聖徳太子の狂歌を始當上方將軍家諸大名地下に至るまで古今名人の狂歌秀逸なるを集む中世より板本不足し悉く採れど不足の所流布せしれ書を採ひし其後吉乃狂庫に納りおりしを隣く中下し是を寫して板本と撰ひ辰の年に發行を

歌道人物志　小本七冊　合本一冊

古今歌人の姓氏年暦歌学名のまで悉く記して同録歌人の名氏いろはにわけ歌人考をうけしむいづれの歌人にいたる人と知りわかり學者重宝の書なり

歌道手引草　全一冊

是は歌書の集めて歌讀従いれをわけて女中歌を詠むもの心得べき法を悉く加ふ先ず六古今和歌集和歌感徳物語又十ヶ条百人一首二十六歌仙伊勢物語皆さ書一冊にあり其外歌ある事よろしく撰びて記を

歌林

名所をいろはにわけふりして悉く出し歌の續合古歌まくら詞名所あるを

同増補　有賀長伯撰　倉本十三冊　歌いろはわけ一冊　全十三冊

右大成を増補して名所を大成なる書なり

名數和歌選　全三冊

和歌の數あつめ古今三本三島の傳受より源氏六十四帖の歌まで一より順に數よりて和歌を集め註を加へ風雅乃本なり

岩躑躅　全二冊

業平の雅傳の道をしるしいにしへを始として此頃の歌あつめ名歌多く集めしのを

古今和歌集　全二冊

堂上方校正集本也吉文字屋板

歌仙二葉抄　全三冊

三十六歌仙の歌を悉しく注釈ある書なり

い

筆道稽古早学問　全四冊

入木道ノ秘密口傳悉ク顕ハシ格法七十五点ノ筆道奥義ヲ記シ諸流ノ筆形筆跡ヲアツメ筆道訓ノ傳授正躰八景詩哥極則四躰千字文国字引能書手習法名言等ヲ集メ載ス此書ヲ見テ手跡ヲ稽古スレハ上達スルヿ神ノ如シ其外詩哥ノ仕様石印彫様ホマデ初学ノ便リニ成ルヿヲ記ス

人家万宝大益重法之書　全部九冊

初メ二冊ハ人々万宝ノ第一長生冨貴ヲ持ツ心得ヲ記シ心ノ持様ニテ父子兄弟家内安楽ニ暮サレル身ノ行ヒ方ソノ外徒益アルヿ卅三ケ条ヲ解キ示シ次ニ下モニ記ス智術全書七冊ヲ副ヘ弘メ申シ候此書ニテコトニ人家ノ万宝ヲ生スルノ書ナリ

錦嚢智術全書　七冊

智恵ヲ以テ重キヿノ軽ク出来ナラヌヿノ心易ク調ノ奇妙ノ秘傳秘密ヲ書アラハス書ナリ其集ムル所凡ノ有無晴和ノ晴雨日取ノ吉凶舟ニノル法水煉ノ法地震雷前方ニ知リ瓦山ニ木ヲ生シ井戸ヲ清水トナシ古ノ妙術妙茶打撲金瘡治方男女ヲ養人ニスル数々ノ法衣服器財ニ付サマ〴〵ノ妙術魚鳥ヲ貯ヘ料理妙法虫獣モ〳〵サシタルヲ治シ或ハ蚊虱ノ類スベテ虫ヲ除キ艸木ノ花ヲ自由ニ咲セ菓ヲ多クナラセ或ハ久シク貯ヘ様ソノ外此書ヲ用イテ事ヲ為サバ徳益廣大万宝ヲ得ルノ書ニシテ先ニ行ナフ処ノ博物筌ヨリモ此書ニ集ル所猶亦勝レルヿ倍々ナリ

四聲字林集韻大全　全一冊

字ノ誤リヲ訂シ大ニ改正精撰仕名オクニ正俗字例両韻弁義其外詩作便用ノヿ等此度アラタニ増補イタシソロ袋紙藍摺ニテ下モノ如ク記シ出シソロ本

浪華書舗　吉文字屋